

父子関係に関する発達的研究

(課題番号60301013)

昭和60年度、61年度科学研究費補助金{総合研究(A)}
研究成果報告書

昭和62年3月

1381148

横浜国立大学

横浜国立大学教育学部教授

研究代表者

依田 明

は し が き

依 田 明

心理学の分野でも、母子関係と子どもの発達に関する研究は、以前からさかんにおこなわれてきた。質はともかくとして、量だけは莫大なものである。それにくらべると、父子関係の研究の数は少ない。

その最大の理由は、心理学者のあいだに、子どもの発達にとって基本的に必要なのは母親であって、父親は二義的な存在にすぎないという「思いこみ」があったからである。

しかし、子どもの心身の発達にとって父親もまた重要な役割をはたしていることは、否定できない。現在、子どもたちはさまざまな問題をおこしている。その原因のひとつは、父親が家庭において父親としての役割をきちんと果たしていないことにあるといわれている。けれども、父親としての役割とは何かということになると、かならずしも明確に定義できないのが、現状ではないか。

そこで、われわれは父子関係と子どもの発達をテーマに、総合的な研究を試みることにした。幸いにして二年にわたって、科学研究費をいただくことができた。二年間の研究の成果を、ここに報告する。

研究の対象になった子どもの年齢は、幼児から青年にまでおよぶ。現在、なお資料を分析中のものがほとんどである。この報告は、序報と考えていただきたい。さらに分析をすすめる、適切な機会におおやけにしていきたいと考えている。

御批判、御助言をいただければ幸いである。

研究組織

研究代表者：	依 田 明	(横浜国立大学教育学部教授)
研究分担者：	繁 多 進	(横浜国立大学保健管理センター助教授)
	齊 藤 浩 子	(東京都立立川短期大学教授)
	青 柳 肇	(東京都立立川短期大学助教授)
	滝 本 孝 雄	(独協大学教養部助教授)
	鈴 木 乙 史	(聖心女子大学助教授)
	清 水 弘 司	(埼玉大学教育学部助教授)

研究経費

昭和60年度	1 3 0 0 千円
昭和61年度	5 0 0 千円
計	1 8 0 0 千円

1381148

横 浜 国 立 大 学

目 次

2 歳児および3 歳児の父親へのアタッチメント

繁多 進・出口和生…………… 1

幼児の父母子関係についての観察的研究

— 課題場面および自由遊び場面における

父子および母子の相互作用分析 —

斉藤浩子・青柳 肇・田島信元…………… 9

父母の養育態度と達成行動

— CCP による分析 — 青柳 肇…………… 26

青年期における両親への態度に関する性差,

きょうだい差の検討

瀧本孝雄…………… 37

単身赴任家族を対象とした家族関係評価尺度の作成

鈴木乙史…………… 51

2 歳児および 3 歳児の父親へのアタッチメント

繁 多 進
出 口 和 生

1. 序論

attachment 理論は、Bowlby (1958) がその概念を提唱して以来、多方面から研究が進められてきた。attachment の発達要因としては、乳幼児自身の気質や潜在性などの生得的要因と、乳幼児を取り巻く環境的要因が上げられる。後者の環境的要因のなかでも親子関係、特に母親の存在が最も強い影響力を持つことは、周知の事実であり、特に研究の盛んな分野である。それでは、母親に次いで強い影響力を持つと考えられる父親について目を転じてみると、こちらの研究は数少ない。このように親子関係の研究が母子関係に偏ってしまったのは、発達の初期の段階においては、父親より母親の方が子供との交渉が多く、より子供にとって重要な人物であるという考えが一般的であったこと、及び、父親から直接資料を取ることが困難であるという研究方法上の難点があったことによると考えられる。特に父・子相互作用の研究は、その性質上極めて少ない。

Abelin (1971) は、精神分析学の立場から、乳幼児期の父子関係について述べ、「微笑反応などに始まる父親との関係は、母親や同胞に対するのに比べやや遅れるが、母親に対するのと同じ時期（1～4ヶ月）に始まり、5～9ヶ月には父親への愛着を増し、9～14ヶ月には父親に特別の愛着を向けるようになる。父親は幼児にとって興味ある対象となり、拡大されていく探索活動の魅力ある対象でもある。女の子は男の子より早期に父親に愛着を示し、見知らぬ男性には警戒的で、男の子は見知らぬ男性に対して、より探索的に接近する傾向がある。1～3歳では、母親との関係は両価性に満ちたものになっていくが、父親との関係は、母親とのアン

ビバレントを解決するのに必要な愛情対象であり続ける。」としている。

Ban & Lewis (1974) は、1 歳児 20 名を、父子・母子別々に緊張のない状態で 15 分間プレイルームで自由に遊ばせ観察したところ、接近・接触では男女児とも父親より母親に愛着を示す傾向があると報告している。

Lamb (1977) は、父子・母子相互作用の一連の研究によって、乳幼児が母親に独得の愛着をおこすと言う確かな根拠はないとしている。また、生後 15～24 ヶ月児では、より親和的な行動に注意を向け、母親よりむしろ父親に愛着を示すとしている。さらに性差についてみると男児は父親に、女児は母親に対して愛着行動を多く示していると報告している。

Kotelchuck (1977) は、父子相互作用の研究をプレイルームにおいて実験的に観察している。6～24 ヶ月児の行動において、母親・父親への差はわずかであるが、見知らぬ人への行動は明らかに異なると報告している。

国信・松本・桐島 (1983) は、Ainsworth らが標準化した Strange situation 法を父親をも含めたものにして実験的観察をおこない、父親にも十分に愛着行動が示されることを明らかにしている。

そこで、本研究では、これらの先行研究を参考として、2 歳児と 3 歳児の父親への愛着の存在・発達を中心に据え、さらに性差と父親・母親への愛着の関係についても検討する。また、望ましい愛着の発達には、父親の子供に対するどのような行動が必要なのかも検討して行くことにする。

父親は、単なる同居人ではなく、母親に匹敵する重要な位置を占めていることを認識しなく

てはならないと考える。

2. 研究1

<目的>

- I. 乳幼児の父親・母親・見知らぬ人に対する行動の違いを調べ、父親への愛着について検討する。
- II. 男児と女兒の父親・母親への愛着について検討する。

<方法>

桐島らの先行研究との比較・総合検討を行うため、1983年の被験児をパターン1、1985年の被験児をパターン2と呼ぶことにした。

- 1) 被 験 児……2歳児・3歳児 計77名
(誕生日前後1週間以内)
パターン1……2歳児20名(男14, 女6)
3歳児20名(男9, 女11)
パターン2……2歳児19名(男7, 女12)
3歳児18名(男9, 女9)
- 2) 実験期日
パターン1……1982年7月26日～12月12日
パターン2……1985年8月4日～12月15日
- 3) 実験場所……横浜国立大学 教育学部
心理学教室
- 4) 実験手続き……子供の母親へのアタッチメントの測定方法として Ainsworthらが標準化した Strange Situation 法があるが、これには父親が考慮されていない。そのため、この方法に父親の場面を追加した改編版の Strange Situation 法を用いた。パターン1では父子分離後に父親が再会し、パターン2では母親が再会するように設定されている。実験事態の概要は Appendix に示してある。分析方法も Ainsworthらの方法をそのまま採用したが、Ainsworthらは頻度測定項目8項目(Appendix)のうち、SmilingとVocalizationの2項目は絶対頻度法、その他の6項目は15秒タイムインターバル法(15秒間に一度以上生じた場合1点とする)としているが、

本研究では被験児が2・3歳児であるため、Vocalizationも15秒タイムインターバルで行った。評定項目6項目は Ainsworthの基準にもとづいている。なお、分析は実験の全エピソードを収めた2本のビデオテープから行った。

<結果と考察>

- (1) 父親と母親の差異。

Table 1～4は両親ともに在室しているエピソード2とエピソード9Cについての行動の一覧である。これらを参考にしながら、2歳児と3歳児の特徴について述べてみよう。

項 目	母親	父親	Z 値	P
発 語	3.02	1.71	-2.78	**
接 近 ・ 接 触 要 求	2.73	1.75	-2.27	*
Distance Interaction	4.94	3.57	-3.53	**

Table 1 エピソード2における父母への行動(2歳児)

項 目	母親	父親	Z 値	P
視 覚 的 定 位	5.58	3.76	-2.81	**
発 語	3.73	1.88	-2.16	*
Smile	1.88	0.98	-2.80	**
接 近 ・ 接 触 要 求	2.64	1.29	-2.19	*
接 触 維 持 要 求	1.18	1.01	-2.67	**
Distance Interaction	4.77	4.10	-2.70	**

Table 2 エピソード2における父母への行動(3歳児)

項 目	母親	父親	Z 値	P
探 索 的 操 作	7.12	5.00	-2.51	*
発 語	3.60	2.45	-2.11	*
接 近 ・ 接 触 要 求	3.29	1.80	-3.47	**
接 触 維 持 要 求	1.39	1.17	-2.68	**
Avoidance	1.00	1.07	-2.02	*

Table 3 エピソード9Cにおける父母への行動(2歳児)

項 目	母親	父親	Z 値	P
接 近 ・ 接 触 要 求	3.23	1.50	-2.36	*

Table 4 エピソード9Cにおける父母への行動(3歳児)

実験開始直後のエピソード2では、2歳児・3歳児ともに父親よりも母親に対する愛着行動の方が多く示されている。また、3歳児の方がより統合的に母親に対して愛着行動を取っている。

それに対して、分離場面（Alone 場面）を経ってから両親に再会するエピソード9Cでは、3歳児の様相がかなり異なっている。エピソード9Cでの3歳児は、父親に対して母親とほとんど同じ愛着行動を示している。父親・母親・子供という三者の構成は同じであるエピソード2と9Cの違いは、両親の行動の違いによると考えられる。エピソード2では両親に対して家庭におけるのと同様にふるまうことが教示されているが、エピソード9Cではこの場面で入室した親（パターン1では母親、パターン2では父親）に対して話しかけと抱きあげをするように教示され、先に部屋にいた親にはその場に応じた行動をするように教示されている。したがって、エピソード2では子供の要求に応じて親が答えるのに対して、エピソード9Cでは親の側からより積極的な相互作用がなされていることになる。このことから3歳児は、親から何もしなければ母親に交渉を求めるが、父親から積極的に働きかけをすれば母親と同等の相互作用を持つことができると考えられる。

2歳児について考えると、エピソード9Cはエピソード2の傾向とほとんど同じである。このことは、2歳児は父親から働きかけをしても母親をより求めると言うことである。したがって、2歳児においては、父親への愛着が不完全なものであることを示していると考えられる。しかしながら、2歳児の場合も、見知らぬ人に対する行動と父親に対する行動との差異は明瞭なので（Table 5, 6）、3者に対する関係を次のように図示することができるだろう。

すなわち、2歳児では、父親は母親ほどの

2歳児	M	F	S	比較
視覚的 定位	5.34	5.42	6.06	M<F<S
発 語	7.50	3.09	2.99	S<F<M
Smiling	1.34	0.09	0.06	S<F<M
接近接触要求	4.25	4.79	2.00	S<M<F
接触維持要求	3.00	2.90	1.31	S<F<M
Distance Interaction	6.71	4.50	3.69	S<F<M

Table 5 エピソード9Aおよび9Bにおける3者に対する行動（2歳児）

3歳児	M	F	S	比較
視覚的 定位	6.66	6.26	5.36	S<F<M
発 語	7.44	5.94	6.62	F<S<M
Smiling	1.50	3.00	1.41	S<M<F
接近接触要求	3.88	4.00	1.29	S<M<F
接触維持要求	2.07	2.32	1.06	S<M<F
Distance Interaction	6.00	4.88	4.80	S<F<M

Table 6 エピソード9Aおよび9Bにおける3者に対する行動（3歳児）

※ Mは母親、Fは父親、Sはストレンジャー

2歳児（見知らぬ人）	≪（父親）	≪（母親）
3歳児（見知らぬ人）	<（父親）	≐（母親）

強い愛着の対象とはなりえていないが、父親と見知らぬ人との間には大きな違いが認められる。3歳児では、父親と母親はほぼ同等の愛着の対象であり、見知らぬ人もかなり受け入れることができるといえよう。

<結果と考察>

(2) 性差と年齢差

性の主効果のみられるエピソードは4と5と9Aであり、これらはすべて見知らぬ人のある場面である。Table 7を見ると、女兒よりも男児の方が見知らぬ人（女性）を早く受け入れることができるようである。Abelinが見知らぬ人が男性である場合に同様のことを示しているが、幼児期には女兒の方が警戒的なようである。次に性と年齢の交互作用に

Ep	項 目	男	女	F 値	P
4	探 索 的 移 動	3.83	2.02	5.58	$P<0.05$
4	接 触 維 持 (Stranger)	1.07	1.02	4.90	$P<0.05$
4	Distance Interaction (Stranger)	4.30	3.73	4.36	$P<0.05$
5	接 近 接 触 (Stranger)	2.25	1.36	8.12	$P<0.01$
5	接 触 維 持 (Stranger)	1.09	1.02	4.60	$P<0.05$
9A	Avoidance (Stranger)	1.31	1.13	4.77	$P<0.05$

Table 7 性差にみられる項目

ついてみると Fig 1 と 2 に端的にみられるように接近・接触要求に差異が認められる。エピソード 2 において母親への接近・接触要求は 2 歳児では女兒が高く、3 歳児では男児が高いのに対して、エピソード 9 C では父親への接近・接触要求は 2 歳児では男児、3 歳児では女兒が高くなっている。この結果だけか

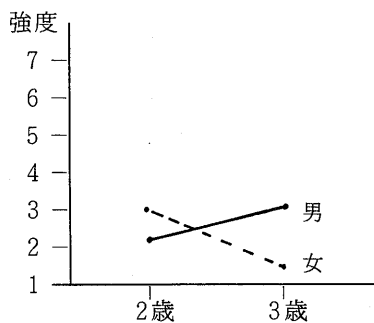


Fig 1 母親への接近・接触要求 (エピソード 2)

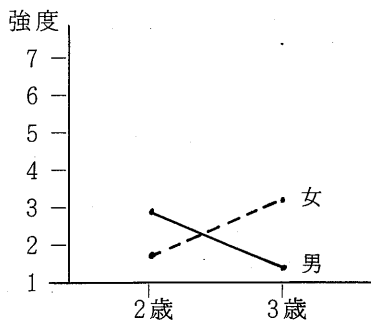


Fig 2 父親への接近・接触要求 (エピソード 9 C)

ら短絡的に考えることはできないが、両親のいる場面では 2 歳児が同性の親、3 歳児が異性の親との接近・接触を望む傾向がみられる。父親と母親の違いと性差についてさらにみると Fig 3 と 4 にみられるように探索的操作と Distance Interaction が、男児は父親場面 (パターン 1) が高く、女兒は母親場面 (パターン 2) が高い。すなわち同性の親の方が、探索行動と相互作用が多くなることが示されている。このことは、同性の親をより安全の基地として使用することを示していると考えられよう。

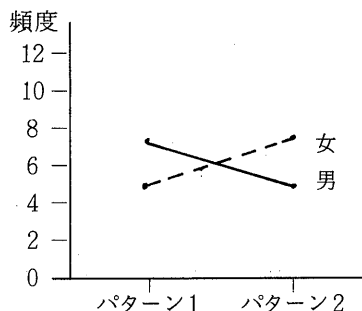


Fig 3 探索的操作 (エピソード 9 B)

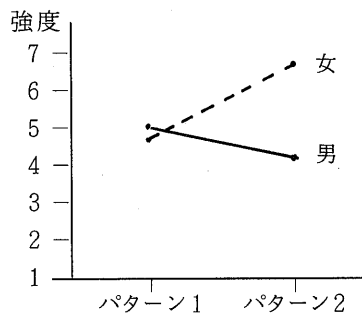


Fig 4 Distance Interaction (エピソード 9 B)

以上のことから、男児・女兒と父親・母親の関係を図式化すると次のようになる。

◎ 2 歳児	男児	父親
--- 弱	女兒	母親
— 中		
== 強		
◎ 3 歳児	男児	父親
	女兒	母親

3. 研究2

<目的>

父親になついている子の特徴を調べ、父親への愛着の日常的生成要因について検討する。

<方法>

- 1) 調査対象……研究1の被験児の両親74組
計148名
- 2) 手 続 き……質問紙はパターン1・2とも同一の質問項目が用いられた。ただし、パターン1と2では、父親・母親という言葉を逆に配置した。主な内容は、①子供に対してどのような感情を抱いているか。②実際に家庭で行っている養育態度・状況。③子供とのかかわり合い方。④その他（フェイス・シートなど）である。この質問紙を研究1の実験終了後、両親それぞれに記述して頂いた。その際、二人で相談し合わないよう教示した。

得られた回答から父親になついていると考えられるグループ（父親なつき群）と父親にはなついていないと考えられるグループ（母親なつき群）とを抽出して、父親になついている子の特徴と父親の行動を分析する。

<結果と考察>

両親に対する質問紙で両親ともに「母親になついている」と答えたものが16組あり、これを「母親なつき群」とする。両親ともに「父親になついている」と答えたものはいないが、片親が、「どちらかといえば父親」と答えたものが13組いる。この13組については、父親への愛着が比較的強い群と言えよう。そこで、これを「父親なつき群」と名付けて検討する。

Table 8 に年齢別の人数が示されるが、2歳

年齢 なつき	2 歳	3 歳	
父親なつき	5	8	13
母親なつき	10	6	16
	15	14	29

Table 8 父親なつき、母親なつきの人数

児に「母親なつき群」が多く、3歳児に「父親なつき群」が多い傾向にある。2歳児よりも3歳児の方が父親の存在をより認めてきているためと考えられる。

それでは、Strange Situationにおいて、どのような差異がみられるのであろうか。「父親なつき群」と「母親なつき群」とで、有意差の認められた項目をTable 9と10に示すが、2歳児・3歳児ともすべての項目において、「父親なつき群」の方が健全な愛着を示す結果となっている。また、2歳児全体・3歳児全体の中央値と比較すると、2歳児では「母親なつき群」が全体に近い数値を示し、3歳児では「父親な

Ep	項 目	父 親 なつき	母 親 なつき	U値	P	2歳児 全 体 中央値
2	探索的 移 動	7.00	2.64	5.0	*	4.00
2	視覚的 探 索	12.00	11.08	7.5	*	11.98
3	探索的 移 動	7.00	3.39	5.5	*	3.99
4	発 語 (Stranger)	6.40	0.07	3.5	**	0.98
4	Smiling	3.67	0.80	5.5	*	1.04
9C	Smiling	4.92	1.09	8.5	*	4.38
9C	定 位 (第一対象)	4.92	1.78	6.0	*	3.03

* $P < 0.05$ ** $P < 0.01$

Ep	項 目	父 親 なつき	母 親 なつき	U値	P	3歳児 全 体 中央値
2	定 位 (第一対象)	5.77	6.92	8.5	*	3.69
8	Crying	0.00	0.89	8.0	*	0.00
8	Search (Parents)	2.17	6.50	8.0	*	2.45
9C	視覚的 探 索	7.94	6.72	5.0	*	7.97

* $P < 0.05$ ** $P < 0.01$

つき群」が全体に近い数値を示している。このことは、2歳児においての「父親なつき群」は父親への愛着の形成が早く、3歳児においての「母親なつき群」は父親への愛着の形成が遅いことを示していると考えられる。したがって、2歳から3歳の間で父親への愛着の形成に大きな進展がみられるものと考えられよう。

日常生活において、父親になついている子は、父親への愛着が強く、より望ましい行動をするようである。では、父親・母親のどのような行動が父親になつく要因となるのかをTable 11にみると、父母の対話や子供との量的・質的に高い相互作用が重要なようである。両群の父親には、出勤・帰宅時には有意差が認められないことから、在宅時の相互作用の質が問題のようである。子供が父親になつき、強い愛着を形成するには、単純な身体接触だけでなく、子供への語りかけを多くともなうような、より高度な相互作用をすることが必要なようである。

<父親なつき群優位>

父親と子供が遊ぶ時間は、多い方だと思う
(df = 1, $\chi^2 = 5.94$, $P < 0.05$)

父親と母親の話し合う時間が多い
(df = 1, $\chi^2 = 5.51$, $P < 0.05$)

父親が子供をよく寝かしつける
(df = 1, $\chi^2 = 8.60$, $P < 0.01$)

父親が子供をよく風呂に入れる
(df = 1, $\chi^2 = 4.96$, $P < 0.05$)

父親が子供によく絵本を見せる
(df = 1, $\chi^2 = 5.92$, $P < 0.05$)

<母親なつき群優位>

母親が子供と遊ぶ時間が多い
(df = 1, $\chi^2 = 3.12$, $P < 0.10$)

父親が子供の身体をゆする
(df = 1, $\chi^2 = 3.75$, $P < 0.10$)

父親が子供に高い高いをする
(df = 1, $\chi^2 = 3.45$, $P < 0.10$)

Table 11 日常の相互作用の差異

4. 全体的考察

先行研究で見いだされたいろいろな2歳児と3歳児の特徴が本研究においても認められた。3歳児は両親との交渉をCryingよりも発語やSmilingによって行い、分離によってひどく混乱しなくなっている。また、3歳児は見知らぬ人とも相互作用を行うことができるようになり、見知らぬ人が在室していても探索行動を続けることのできる子が多い。愛着の発達段階で言えば、第四段階への移行が3歳ごろであるという報告を支持する結果が得られた。

父親が2歳児・3歳児にとって、どのような存在であるのかを具体的に示す結果も得られている。2歳児が分離による混乱が大きくCryingも多いことは前述したが、この混乱を父親では十分に解消することができなかった。3歳児では分離による混乱自体も小さくなるが、父親によって十分に解消され、父親と母親への対応はほとんど同じものが示されていた。ただし、両親ともに在室する状況では、父親側から働きかけなければ母親が優位であった。どちらの年齢でも、父親への対応は見知らぬ人とは異なったものであり、父親への愛着が存在すること自体は支持された。

性差について考えると、まず、男児の方が見知らぬ人（女性）を早く受け入れることが示された。また、両親との関係を見ると、2歳児では同性の親、3歳児では異性の親との接近・接触要求が強いことが示された。さらに、同性の親とは、探索や相互作用などを離れて行うことが多く、3歳になると同性の親をより安全の基地として使うことが多くなる傾向も示されている。

日常生活において父親になついている子供は、父親への愛着が強く、より望ましい行動をするようである。父親のどのような行動によって、子供が父親になつたのかを見ると、父母の対話や子供との質的に高い相互作用をすることが必要なようである。実際に被験児とその父親に接

したときの印象も、「短時間でも子供の要求に答える父親」が子供との関係が良好であるように感じられた。たんに接触時間の問題だけではないようである。

5. 要約

本研究は、母子関係に比較して研究の遅れている乳幼児期の父子関係について、愛着行動の面から明らかにしようとするものである。具体的な目的としては、以下の4点が上げられる。

- ①(研究1) 2歳児と3歳児との愛着行動の差異から父親の影響を検討する。
- ②(研究1) 父親場面と母親場面の比較により、父親への愛着を検討する。
- ③(研究1) 性差と父母の影響の関係を検討する。
- ④(研究2) 父親への愛着の日常的生成要因を検討する。

研究1は、1983年のパターン1と1985年のパターン2を合わせて2歳児39名、3歳児38名の計77名の家庭児とその両親を対象として行われ、従来のStrange Situationに父親の場面も設定した改編版のStrange Situationを実施した。研究2は、研究1終了後に被験児の両親に答えていただいた質問紙による調査である。

研究1及び研究2をとおして得られた主な結果は次の通りである。

2歳から3歳にかけて、父親への愛着は存在し、母親への愛着の第4段階への移行とともに大きく変化する。また、同時に、遊びの対象は同性の親となり、接近・接触要求は同性の親から異性の親へと変化する傾向にある。この時期の父親の側からの質的に高い相互作用は、愛着の発達や探索活動に影響を与えるようである。

具体的には、以下の結果・考察が得られた。

- 1) 3歳児は2歳児に比較して、より安定した愛着を示す行動が多く認められた。愛着の発達が第4段階へ移行したためと考えられる。
- 2) 2歳児は不安を父親によって解消ができな

い。しかし、3歳児は父親によって解消ができる。

- 3) 3歳児は父親に対して、母親に対するのとはほとんど同じ行動をとる。ただし、両親がいる場合には、父親から働きかけをしない限り母親に優位な行動をとる。
- 4) 見知らぬ人と父親・母親は明らかに区別されている。
- 5) 2歳では同性の親、3歳では異性の親への接近・接触を求める傾向がみられる。
- 6) 3歳になると、同性の親とは距離のある相互作用が多くなってくる。
- 7) 父親になつた子は、より望ましい行動を取るようである。
- 8) 父親への愛着には、質的に高い父子相互作用が必要なようである。

参 考 文 献

- Abelin, E.
"The role of the father in the separation-individuation process"
Separation-individuation, 1971
- Ainsworth, M. D. S.
"Patterns of Attachment", 1979
- Ban, P. L. & Lewis, M.
"Mother and father, girls and boys: attachment behavior in the one-year-old"
Merrill-Palmer Quarterly, 1974
- Bowlby, J.
"Attachment and loss: vol 1", 1969
- Lamb, M. E. Ed. (久米稔他訳)
Kotelchuck, M.
"父親の役割—乳幼児発達とのかかわり—"
家政教育社, 1981

Appendix エピソード構成の概略（1985年）

エピソード	人 物	時 間	内 容
1	子 ども 母 親 父 親 実 験 者	約 30 秒	実験者が両親と子どもを実験室に案内し、立ち去る。
2	子 ども 母 親 父 親	3 分	両親は普段家庭でしているのと同じように子どもに接する。 3分後、母親は「バイバイ」と言って退室する。
3	子 ども 父 親	3 分	子どもが探索している間は、父親は干渉しない。
4	子 ども 父 親 Stranger	3 分	Stranger入室、入室後は以下の行動 A.（1分） 黙って座っている B.（1分） 母親と親しく話す C.（1分） 子どもに話しかける 3分後、目立たないように父親退室
5	子 ども Stranger	3 分 or less	Strangerは子どもに合わせた行動をする。
6	子 ども 母 親	3 分	母親は子どもを落ちつかせ、その後は、遊びに向かわせる。3分後、父親と入れ代りに黙って退室
7	子 ども 父 親	3 分	父親は子どもを遊びに向かわせる。 3分後、「バイバイ」と言って退室する。
8	子 ども	3 分 or less	分離エピソード （alone 場面）
9 A	子 ども Stranger	2 分 or less	Strangerは子どもに合わせた行動をする。
9 B	子 ども 母 親 Stranger	2 分	母親入室、子どもを迎え抱き上げる。 落ちついたら、遊びに向かわせる。 Strangerは黙ってイスに座っている。
9 C	子 ども 母 親 父 親	2 分	父親入室、子どもを迎え抱き上げる。 Strangerは目立たないように退室する。

※ 1983年の実験は父親と母親が逆になっている。

幼児の父母子関係についての観察的研究

— 課題場面および自由遊び場面における
父子および母子の相互作用分析 —

斉 藤 浩 子
青 柳 肇
田 島 信 元

1. 序論

子どもの発達に及ぼす親の影響については、これまで数多くの研究が行われてきたが、ここで親というのは、ほとんどの場合、母親のことをさしている。これは「子どもを育てるのは母親であって、母親の影響がもっとも直接的である」という世間一般の通念にもよるが、幼児の初期経験についての発達理論がもっぱら母親を対象としていることも、母親の重要性を強調する根拠となったと思われる。

ところが、近年の性役割観の変化や共働き家庭の増加などによって、直接的に育児に参加する父親があらわれたことや、乳児が母親に対するのと同じように、父親に対しても愛着形成を行うという研究結果が報告されはじめてから、研究者たちは、父親もまた、子どもに直接間接に影響を与える重要な存在であることに気づきはじめた。

これまでの父親研究をみると、養育態度や養育行動、育児意識などについて、主として質問紙法によって調査・研究したものが多し。父親は勤務の関係で、直接的な面接資料を得ることが困難であるため、子どもを通して質問紙を配布・回収するという手続きがとられることが多い。各発達段階の子どもがもつ父親像についての研究も、資料が得やすいということもあって比較的多い。その他、父親からの影響の所産としての変数として扱うことができる、女性の性役割観・異性観、父親への同一視、子どもの動機づけ、子どもの職業選択傾向などについて、各種の尺度を用いた研究が行われている。

父子関係の研究のなかで、その実施上の困難さの故に、最も研究が少ないのが父子相互作用の研究である。父子相互作用は父子が一緒にいる場面で、子どもが父親に対してどのように行動するか、父親は子どもにどのように振舞うかということである。父子相互作用を観察することによって、われわれは父と子の相互の働きかけが相手にどのような影響を与えるかを知ることができる。観察研究は、質問紙法などでは得られない、具体的で生き生きとした人間の行動を明らかにする。

相互作用の観察には、子どもの家庭を訪問して、そこでの父子（母子）相互作用の生態学的観察を行う方法と、ある程度、条件を統制した実験室場面で、父子（母子）相互作用を観察する方法がある。どちらが資料を得る上で有効であるかは議論のあるところである。

さて、我々は、半構造化された実験室場面において、幼児と父親および母親との相互作用を観察し、幼児期における父子関係と母子関係の特徴をさぐることにした。

2. 目的

半構造化された実験室場面（課題解決場面と砂場遊び場面）において、幼児と父親が同席している状況で、父親の子どもに対する働きかけと母親の子どもに対する働きかけは、どのような特徴をもつであろうか。また幼児は各場面でどのような行動をとるであろうか。父親および母親の行動パターンは、課題の性質によって異なるであろうか。三つの課題解決場面と自由遊

び場面での父母子三者の相互作用を分析することによって、父親と母親の相互作用の特徴を明らかにすることを目的とした。

3. 方法

- (1) 対象： 幼稚園年中組に在園中の子どもとその父母16組。対象者となったのは、都下のT市およびK市所在の幼稚園を通して、実験の趣旨を説明したプリントを父母に配布し、父母と子どもの三者での実験への参加要請に応えたボランティアである。

男児 7名、女児 9名（うち二卵性双生児1組あり）

年齢： 4歳7か月～5歳10か月（平均5歳2か月）

○出生順位： 第1子6人 第2子9人 第3子1人

○父親の年齢： 30歳～40歳（平均35.5歳）

○母親の年齢： 28歳～39歳（平均33.2歳）

○父親の職業： 公務員5人 会社員6人 自営1人 団体職員その他3人

○母親はすべて専業主婦

なお、個々の対象ケースの属性については表1に示してある。

(2) 手続き

父母と子どもの三人で、大学のプレイルームに来てもらい、三つの課題場面と自由遊び場面での父母子の相互作用を観察する。相互作用は被験者の了解を得て、一方視窓からビデオカメラで撮影する。プレイルームでの父母子合同のセッションは4セッションからなり、1セッションは約10分かかるので、全体の所要時間はほぼ40分である。課題の性質は次のべる教示によって明らかにされる。

(i) 教示 — 研究目的 —

今日やっていただくのは、園児の社会性に関する調査です。とくに、親子の遊

表1 対象ケースの属性

No.	性別	父の年齢	母の年齢	子どもの出生順位	家族構成	父の職業
1	男	36歳	33歳	第2子	兄(8歳) 妹(3歳) 妹(0歳) 祖母	公務員
2	男	39歳	36歳	2	兄(7歳)	会社員
3	男	36歳	30歳	1	弟(3歳)	公務員
4	男	34歳	31歳	2	姉(7歳)	建築業
5	男	38歳	36歳	3	兄(7歳) 兄(6歳)	公務員
6	男	40歳	36歳	2	姉(9歳) 祖母	会社員
7	男	35歳	35歳	2	姉(11歳)	公務員
8	女	35歳	28歳	1	妹(1歳)	公務員
9	女	33歳	31歳	1	妹(3歳)	会社員
10	女	38歳	36歳	1	妹(9か月) 祖母、叔母	団体職員
11	女	30歳	28歳	1	弟(2歳11か月) 妹(11か月)	警察官
12	女	37歳	39歳	2	} 兄(7歳) 二卵性双生児	大 学 事務員
13	女	37歳	39歳	2		
14	女	32歳	32歳	1	弟(2歳)	会社員
15	女	34歳	34歳	2	兄(8歳) 祖父母 叔母	会社員
16	女	34歳	30歳	2	兄(7歳)	会社員

び場面を通しての交流の仕方を観察したいと思っています。ありのままの姿を知りたいのでふだんのおりにふるまって下さい。

(ii) これからの予定

- 1) 4つのゲームをやっていただきますが、最初の3つのゲームは、最終的にお子さんが1人で出来るように教えてあげて下さい。後でお子さんに1人でやってもらいます。最初はルールだけを教え、お子さんに一通りやらせてみて下さい。その後、お子さんのやり方の様子をみてやり方を教えてやって下さい。最後のあそびは3人で自由にや

ってもらいます。各ゲームとも7～8分でやって頂きます。お子さんに1人でやってもらう時間は1～2分です。

2) ゲームは、父子(母子)→母子(父子)→父母子→父母子の順に行います。

3) 父子(母子)のゲームは、お父さん(お母さん)とお子さんが中心になっててもらいます。お母さん(お父さん)は、必要を感じたら手助けしてやって下さい。ゲームは「ハノイの塔」とよばれるものです。「左側の輪(2コ, 3コ, 4コ)を右端のポールに移して下さい。その際、ルールは1回に1つしか動かせないこと、大きな輪を小さな輪の上にのせられないことです。2つの輪の時は3回、3つの時は7回、4つの時は15回が最短コースです。最初は2つから始めて、出来たら順次3つ、4つと続けていって下さい。」

ゲームのポイント

「小さい輪は自由に動かせる。もっとも大きい輪を早く目的地まで動かす。」

4) 母子(父子)のゲーム

次はお母さん(お父さん)とお子さんが中心になって遊んでいただきます。お父さん(お母さん)は必要だと感じたら手助けしてやって下さい。課題は箱入れゲームとよばれるものです。

「この箱の中に8コの色をついた直方体または立方体が入っています。これを全部外に出して元どおりに入れていただきます。その際のルールは、外側の色と大きさに合わせて入れることです。8コの方ができたら、この27コの方をやって下さい。」

ゲームのポイント

「2つの面を常にチェックして入れる。」

5) 父母子課題

今度はお父さん、お母さん、お子さ

んの3人でやってもらいます。ゲームはレゴ・ブロックによるトラクター(ヒコウキ)作りです。

「レゴ・ブロックでこの図と同じトラクター(ヒコウキ)を作ってください。このパンフレットにはモデルがたくさんありますが、他のものは作らないで下さい。」

ゲームのポイント

「モデルをよく見てつくること。下からつくっていくこと。」

6) 父母子自由場面

今度もお父さん、お母さん、お子さんの3人でやって頂きます。正解はありませんから自由にやって下さい。こんどは砂場あそびです。

「箱の中に砂が入っています。この箱庭で景色を作して下さい。そばにおもちゃがありますから、これを置いて下さっても結構です。なるべく正面から作らせて下さい。お父さんとお母さんは、所定の位置にすわって遊んで下さい。」

(iii) 課題についての補足説明

① ハノイの塔: 小さな長方形(6 cm × 8 cm)の板に、3本のポールが立っている。一方の端のポールには下から順に大きさの異なる輪が2～4コはめられている。課題は、最少の回数で他端のポールに同じ順序で輪が積み重なるように移動させることである。

② 箱入れゲーム: 正式にはモンテソーリの二項式とよばれている箱入りのブロックを用いる。9.5 cm × 9.5 cm × 8 cmの箱に直方体6コ、立方体2コを箱の側面の色と積木の側面の色をあわせながら箱に入れていく。最後にフタの色もあわせてでき上りである。インストラクションで27コのブロックと

あるのは、モンテッソーリの三項式とよばれる、同様な箱つみ木である。

- ③ レゴ・ブロック： 教示の時に、レゴ・ブロックの慣れの程度を聞き、もし慣れているようなら、難しい方のヒコウキを作らせる。

- ④ 砂場遊び： 箱庭療法で用いられる箱庭を用いた。玩具も箱庭用のミニチュア玩具である。

(iv) 実験の流れ

- ① 研究目的の説明、課題のプリンシプル説明の後で「しばらくご両親でこのゲームをやって下さい」といって実験者は退室し、父母のインタラク션을ビデオ・カメラで撮影する。その間、子どもは別室でゲームをする（約20分）。

- ② 父-子（母-子）インタラクション
被験者の半数は、父-子課題のハノイの塔からはじめ、残りの半数は、母-子課題の二項式ブロックからはじめる。インタラクションは8～10分間、観察する。8～10分後に実験者はポスト・テストのために入室する。ポスト・テストは2分間で、ハノイの塔は3つの輪の課題を、二項式はそのまま二項式ブロック課題を子どもが自分でできるかどうかをテストする。

- ③ 母-子（父-子）インタラクション
8～10分間インタラクションを観察し、ポスト・テストは約2分間観察する。

- ④ 父-母-子インタラクション（レゴ）
レゴ・ブロックで手本の図解をみながらヒコウキ（はじめてレゴを使う子どもはやや易しいトラクター）を組み立てるのが課題である。ここでは父親と母親のいずれかが中心になって教えるのではなく、「いっしょに教えて下

さい」と教示してある。インタラクションは8～10分間で、ポスト・テストはトラクターの組立てを2分間、観察する。

- ⑤ 父-母-子インタラクション（砂場）
ほぼ10分間、自由に箱庭で遊ぶ父母子の相互作用を観察する。以上で終了。

(3) 実験期日

1985年12月8日～1986年3月9日の間の土曜日または日曜日。

4. 行動評定

録画された父母子の相互作用を、親用と子ども用の行動評定尺度によって評定した。なお、観察中の父母子の相互作用について、子どものようす、課題解決の成功・失敗などを記録した。行動評定尺度は、三宅（1982）^{*}らの尺度に追加

・修正を行なって作成した。（※付録の注参照）

親の行動評定尺度の項目

- ① 課題達成への圧力（高 vs 低）
- ② 介入、干渉傾向の少なさ（高 vs 低）
- ③ 配慮（配慮的 vs 無頓着か）
- ④ リラックス（リラックス vs 緊張）
- ⑤ 援助（高 vs 低）
- ⑥ 賞賛（高 vs 低）
- ⑦ 批判（高 vs 低）
- ⑧ 親のパフォーマンス機能（高 vs 低）
- ⑨ 親の行動統制機能（高 vs 低）
- ⑩ 親のメンテナンス機能（情緒的関与）
（賞 vs 罰）
- ⑪ 親の主導性（介入度）（強 vs 弱）
- ⑫ 父母の協力度（高 vs 低）

上記の12項目のうち⑧～⑫は新しく作成追加したものである。⑧の親のパフォーマンス機能とは、精密コード的な課題指向性を、⑨の行動統制機能は制約コード的な課題指向性をあらわす。⑩の親のメンテナンス機能は子どもの課題解決に当たっての親の情緒的サポートを調べる項目である。また⑪の親の主導性（介入度）は、

一方の親が中心の課題の時に、どれほど従の立場の親が介入するかの度合を示し、⑩の父母の協力度は、子どもの課題解決場面での父母の協力度を調べるものである。上記の12項目は「大変、かなり、やや、どちらともいえない、やや、かなり、大変」の7段階評定で評定された。

子どもの行動評定尺度の項目

- ① 熟慮的行動（熟慮的 vs 衝動的）
- ② 好奇心の旺盛さ（高 vs 低）
- ③ 自信（高 vs 低）
- ④ 持続的注意（高 vs 低）
- ⑤ リラックス（リラックス vs 緊張）
- ⑥ 自立性（自立 vs 依存）
- ⑦ 親への応答性（高 vs 低）
（父親と母親別々に）
- ⑧ 積極的な取り組み傾向（高 vs 低）
- ⑨ 積極的親利用（出来る vs 出来ない）
- ⑩ 親和傾向（高 vs 低）

上記の10項目のうち⑧、⑩が追加された項目である。⑨積極的親利用とは、課題解決に当たってわからないことがあった時に、積極的に親に質問したりして教えることができるかどうかを調べる項目であり、⑩親和傾向とは、課題解決に際して親和傾向がどの程度みられるかを調べる項目である。子どもの行動評定尺度もいずれも7段階評定である。

○行動評定の手続き

父母子の相互作用のVTRを、2人の評定者が一場面ごとに見て、独立に行動評定を行なった。たとえば、父子課題（ハノイの塔）場面を「通し」でみて、一旦、ビデオをとめ、その場面での親の行動と子どもの行動を評定する。次は2人の評定者がお互いに自分の評定値を明らかにする。この時、評定値に2以上差がある場合は、各評定者が自分の判断の根拠をのべる。その結果、評定者が評定値を変更する場合もある。ひとりの子どものについて、ハノイの塔、二項式ブロック、レゴ・ブロックの三課題場面と自由遊びである箱庭遊び場面の四場面について、

父親と母親、および子どもについて行動評定を行なった。評定者間の一致率は79.4%であった。

なお、今回の報告では子どもが同席する前の夫婦だけのインタラクション分析は含まれていない。

5. 結果と考察

16人の子どものについて、四つの場面における父親および母親の行動評定の平均値とSDを算出した（付表1）。付表2は四つの場面における子どもの行動評定の平均値とSDを示したものである。また、結果を見やすくするために、各場面における親の行動について評定項目ごとに平均値をプロットし、プロフィールに描いたものが図1～図4である。図1はハノイの塔場面における父親および母親の行動プロフィール、図2は二項式場面、図3はレゴ場面、図4は砂場場面における両親の行動プロフィールである。

図1～図4でわかるように、どの場面においても、両親の行動パターンはかなり類似している。課題場面と自由遊びである砂場場面ではやや異なる部分があるものの、プロフィールの形は類似している。

「お父さん、お母さん、お子さんの3人でやって頂きます。」という教示条件での課題場面である、レゴ・ブロック場面では、父親と母親が同じように子どもの作業に関与しており、両者の差はみられない。すなわち父親も母親も課題達成への圧力はやや高いし、介入・干渉傾向もやや高い。また、子どもの作業に対してはやや配慮的であり、実験場面ではかなり、リラックスしている。子どもが行き詰まった時には、どちらかといえば援助する方である。子どもが成功した時、子どもに促がされるとはめるが自発的にほめることはあまりない。子どもが失敗した時、批判したり叱ったりすることはない。課題解決に当たっては、子どもに具体的指示を与える面と具体的指示ではなく「（モデルを）よく見なさい。がんばりなさい。」と漠然とした

図1 親の行動評定

<ハノイの塔場面 父—母--->

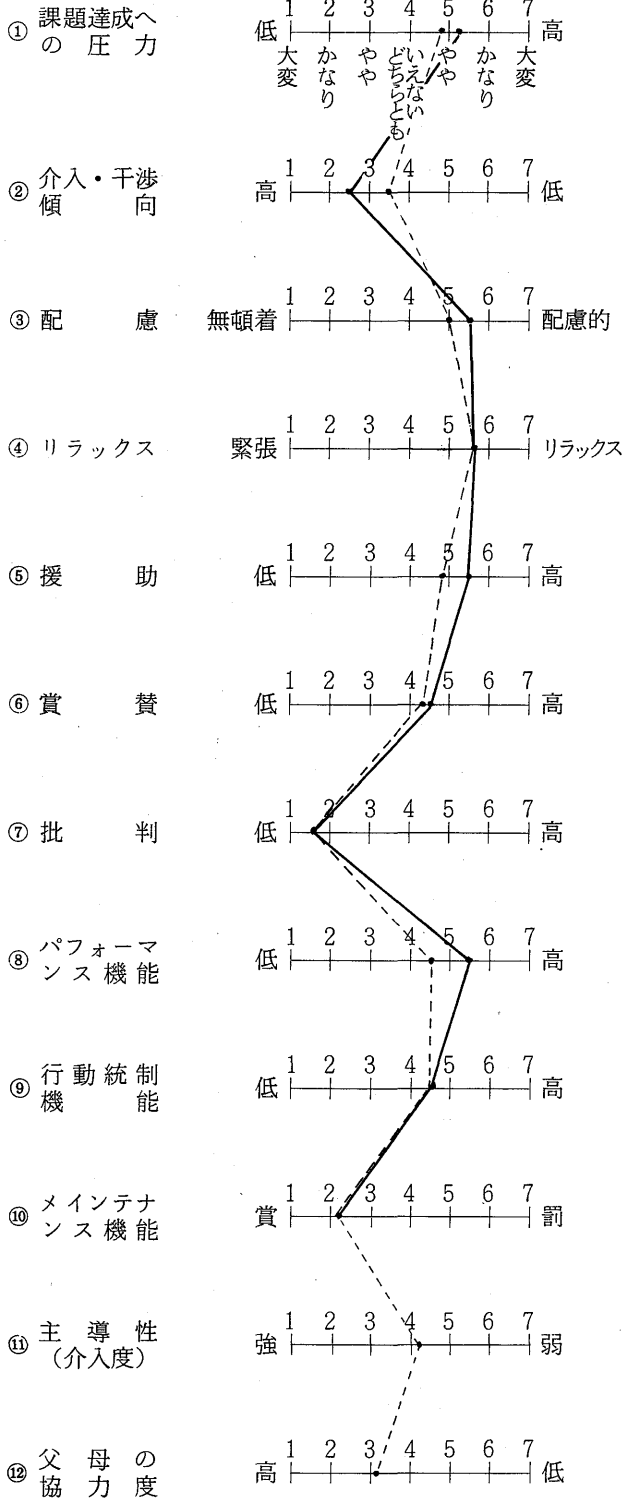


図2 親の行動評定

<二項式場面 父—母--->

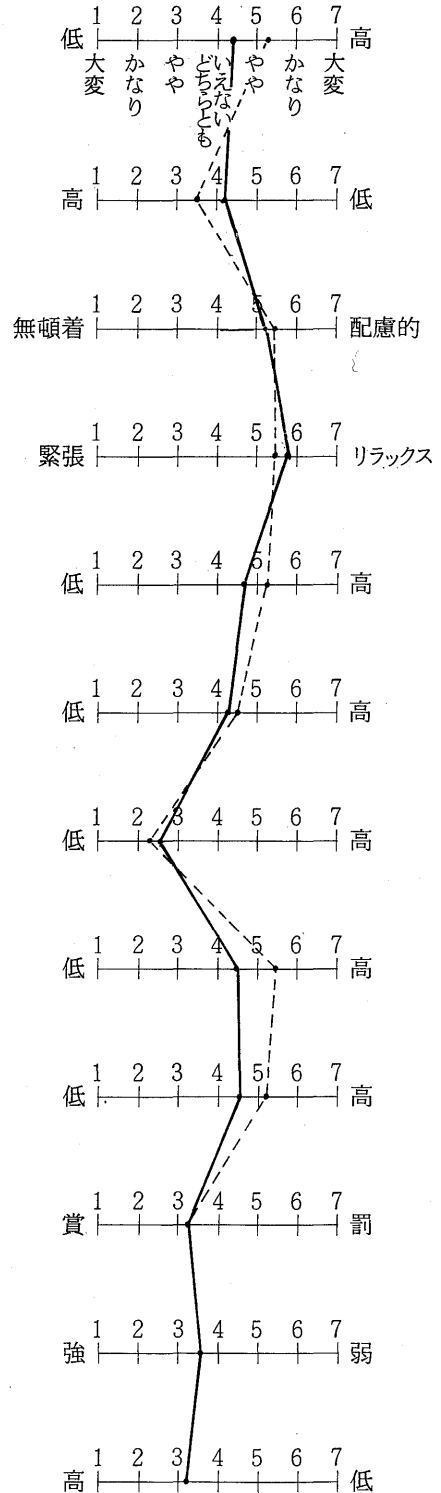


図3 親の行動評定

<レゴ場面 父——母--->

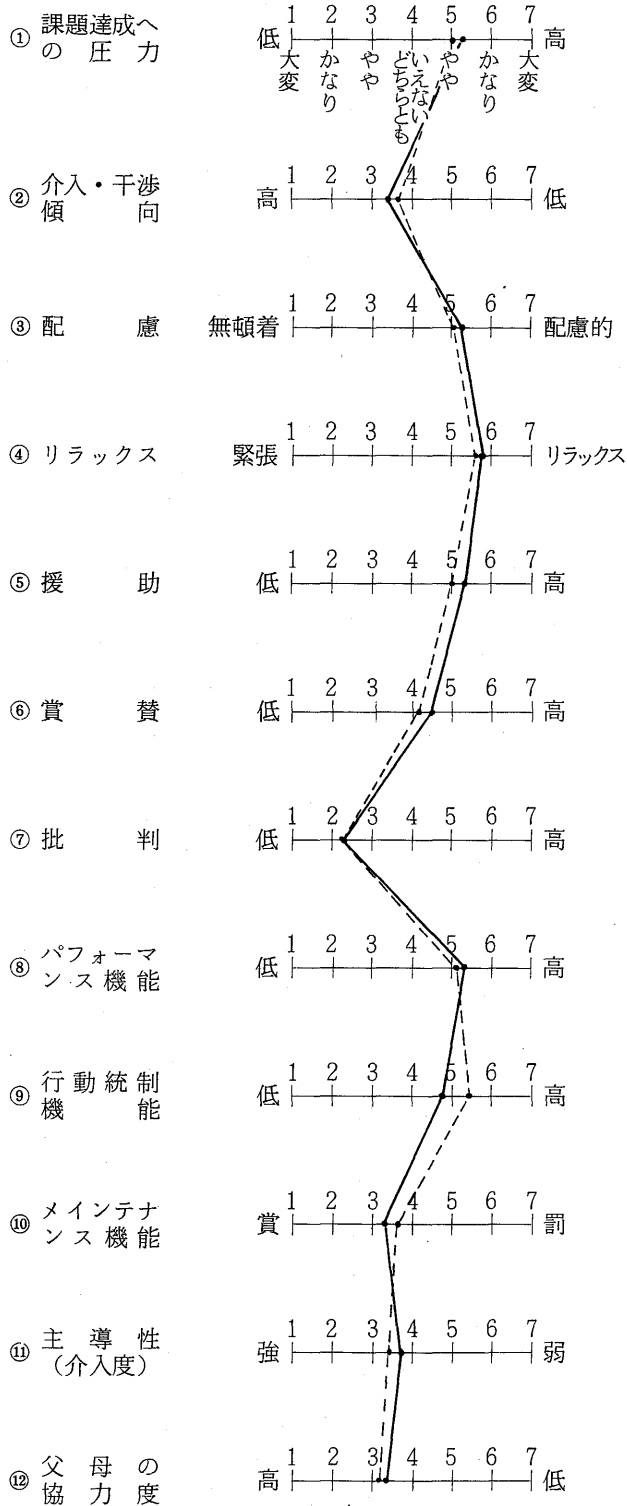
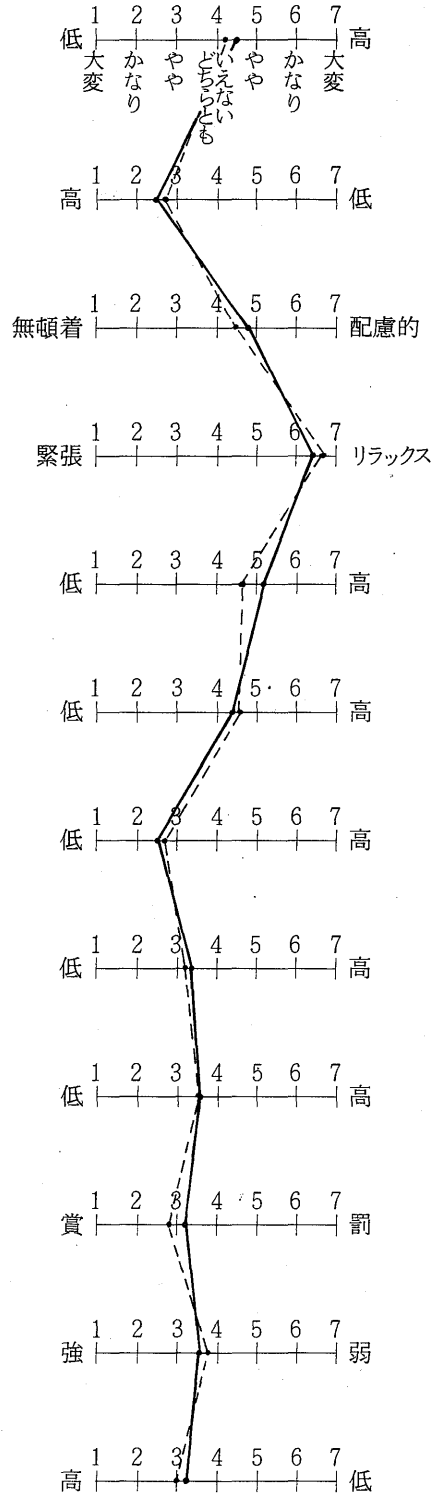


図4 親の行動評定

<砂場場面 父——母--->



指示を与える面がやや見られる。実験場面での子どもに対する情緒的サポートは、どちらかといえばある方であり、親の主導性（介入度）と父母の協力度もややある方である。

同じく「3人でやって頂きます。」という教示条件で、自由あそび場面である砂場場面では、親は子どものやりたいようにやらせる傾向があるので、パフォーマンス機能（精密コード的な課題指向性）も行動統制機能（制約コード的な課題指向性）も発揮される度合いが少ない。

図1のハノイの塔場面と図2の二項式場面では、項目によっては、父親と母親の行動に差がみられる。比較的差がみられる項目は次の通りである。すなわち、課題達成への圧力、介入・干渉傾向、パフォーマンス機能についてはハノイの塔、二項式の両場面で、行動統制機能は二項式場面で母親に差がみられる。けれどもこれらの差は本来の父親と母親の行動特性ではなく、教示条件によるものと思われる。ハノイの塔場面は父親中心の課題であり、二項式は母親中心の課題であるが、図をみると「中心になっている親」の課題達成への圧力、介入・干渉傾向、パフォーマンス機能が高いことがわかる。

父親の行動特性と母親の行動特性のちがいを見るためには、両者が主導的役割をとる場面、あるいは両者とも補佐的役割をとる場面での行動を比較する必要がある。図5は、主導的役割をとる「ハノイの塔課題」での父親と、「二項式課題」での母親の行動を比較したものである。補佐的役割をとる「二項式課題」での父親と、「ハノイの塔課題」での母親の行動を比較したのは図6である。

主導的役割をとる時、父親と母親で差がみられるのは、「介入・干渉傾向」と「行動統制機能」のみで、他の行動特性はかなり類似している。介入・干渉傾向を多く示すのは父親で、子どもの作業に対して指図したり、指示したりして課題解決を助けようとする。行動統制機能は、課題解決のための具体的な指示ではなく「（モ

デルを）見なさい。がんばれ。」などの課題にむかう態度を指示するものでこういったはげまし方をするのは母親の方に多い。

一方、補佐的な立場での父親と母親を比較すると、ちがいがみられるのが、「介入・干渉傾向」「批判」、「主導性」である。母親の方が父親にくらべて介入・干渉することがやや多いが、子どもが失敗しても責めたり、叱ったりすることはあまりない。また相手が中心になって教える課題であるのに、自分の方が主導的になり、介入するのは父親に多くみられる。

12の行動評定項目について、父親と母親の行動をみても、相違点は比較的少なく類似点が多い。これまでの父母子の観察研究の多くも両親を比較的類似した状況で観察した場合、相違点より類似点が多いことを見出している。

次に父母子三者場面での子どもの行動をみよう。三つの課題場面と一つの自由遊び場面における子どもの行動評定をプロフィールにしたのが図7である。同じ課題場面といっても、レゴ・ブロックを用いる場面は他の二場面と異なっているようである。ブロックは子どもが家庭や園で使用したことのある、なじみ深い材料であるためか、他の課題の時よりも子どもはリラックスしており、自信をもって作業しており、わからない所があれば親に教えを乞いながら作業をしている。ハノイの塔（父親中心課題）と二項式（母親中心課題）場面での子どもの行動は、ほぼ共通している。すなわち、課題解決に当たってははじめは慎重に熟慮的にふるまうが、問題がむずかしくなってくると試行錯誤的になることもある。好奇心はまあまあ持っているが、課題解決に当たっての自信は課題がむずかしくなるとあまり持てなくなるようである。課題場面での持続的注意に関しては、ほとんどの子どもが熱心なとりくみを示す。リラックス度はレゴ・ブロック場面よりは低いが、全体的にみるとリラックスしている方である。また自立性の度合いをみると、少し困難な課題になると親の助けを

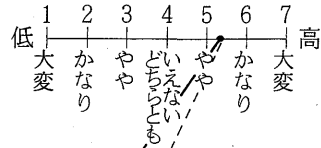
図5 親の行動評定

図6 親の行動評定

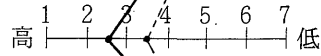
<主導的場面での父親—— 母親---->

<補助的場面での父親—— 母親---->

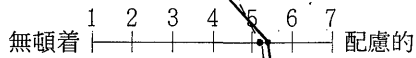
① 課題達成への圧力



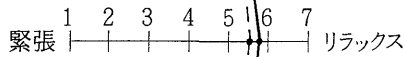
② 介入・干渉傾向



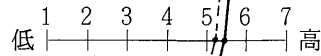
③ 配慮



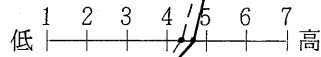
④ リラックス



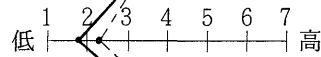
⑤ 援助



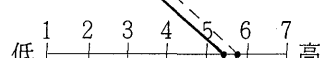
⑥ 賞賛



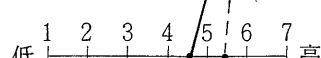
⑦ 批判



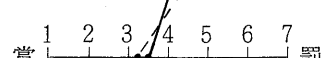
⑧ パフォーマンス機能



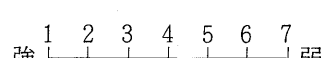
⑨ 行動統制機能



⑩ メインテナンス機能



⑪ 主導性 (介入度)



⑫ 父母の協力度

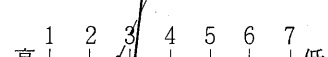
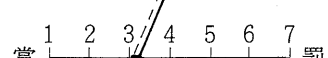
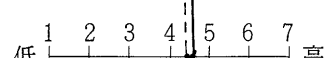
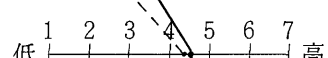
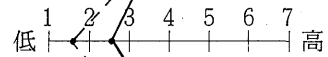
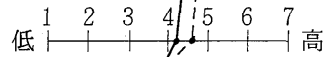
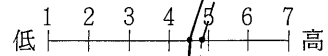
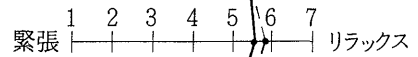
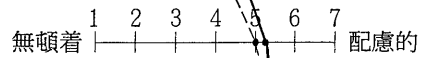
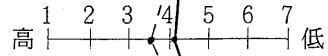
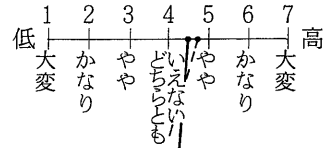
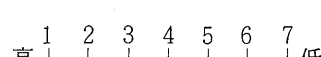
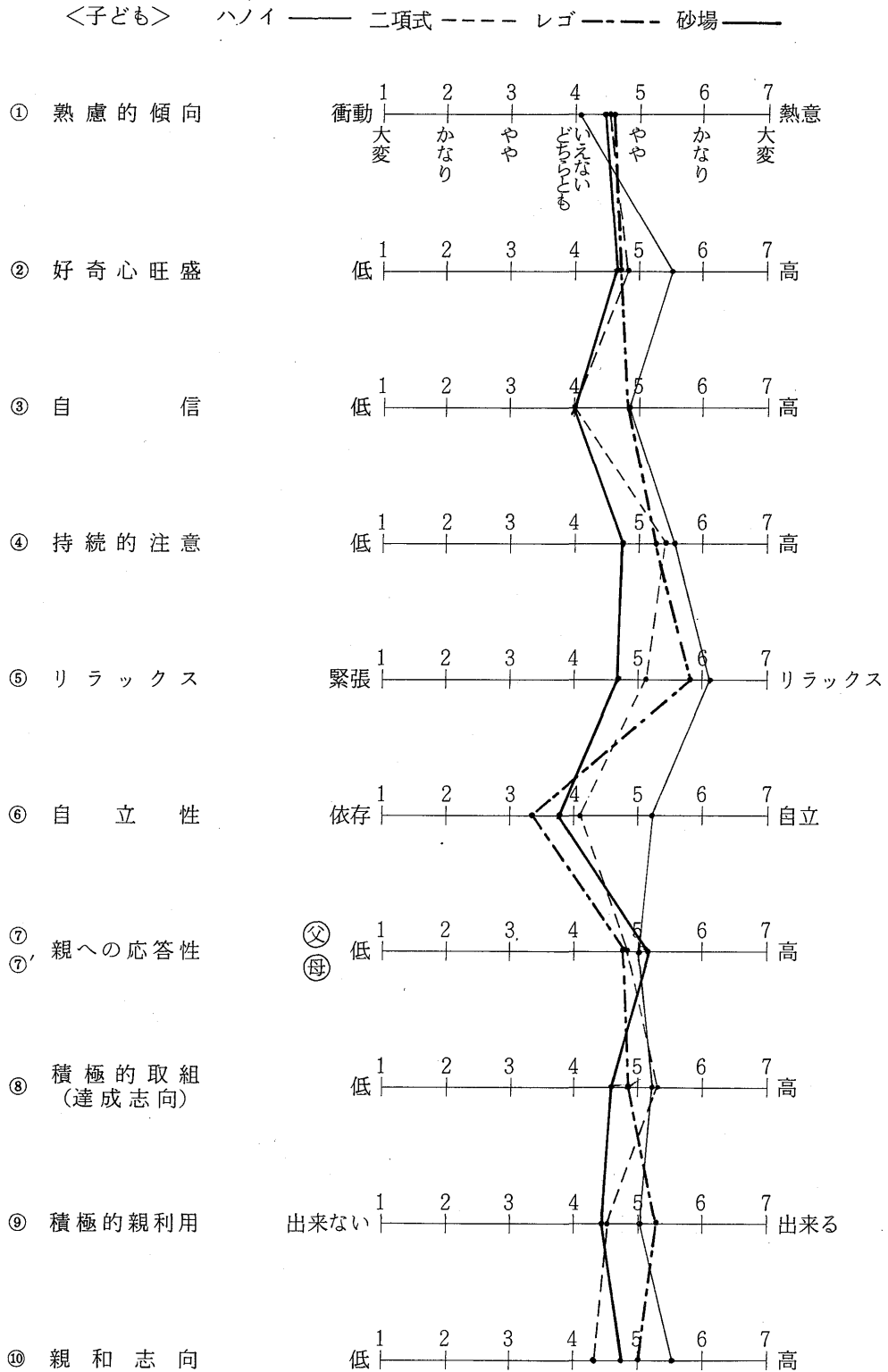


図7 子どもの行動評定



借りようとするが、大方は自分の力で何とか解決しようとする。親への応答性、困った時にどの程度、親を情報源として利用できるかについてはややプラスの評価ができる。課題をきちんとやりとげようとする達成志向と、親との交流を楽しむ親和志向はいずれもややプラスと評定されている。

三つの課題が終了した後におこなわれる砂場遊びでは、課題解決のプレッシャーから解放された後の自由遊びであるので、子どもの行動に変化がみられる。子どもは好奇心を示し、リラックスしており、親に頼らないで自立的にふるまう度合が高く、親との自由な会話が出る頻度も高い。

子どもは三者場面で父親と母親のどちらに多く反応しているであろうか。親への応答性は、課題場面では当然のことながら中心となって教えてくれる親への応答性が高いが、同じく課題場面でも父母が一緒になって教える条件では、父親と母親の両方に同じ程度に応答している。また自由遊びの砂場場面においても父親と母親の双方に同じ程度に応答する子どもが多い。

半構造化された観察場面における父母子の相互作用の様式をこれまで見てきたわけであるが、父親と母親の行動については相違点よりも類似点の方が多い。また、子どもの父親および母親に対する応答性についても差がみられない。

子どもの性によって、親の働きかけが影響されるかどうかについては、あまり影響を受けていないと考えられる。けれども子どもの気質や行動特性、これまでに大きな病気をしたかどうか、低体重児であったかなどの子どもの側の要因が親の子どもへのかかわり方に影響していることは十分に考えられる。また親の側の要因としては、子ども観、信念、価値観、夫婦関係などが重要と思われる。

15組の夫婦と16人の子どもの相互交渉を観察していて気づいたことは、夫婦の行動特性の類似性である。カップルとしての夫婦をみると、

子どもへの働きかけかたにはかなり類似性があった。われわれの被験者には二卵性双生児が1組いる。この2人の性格は対照的で、1方が親和的で、課題解決に際しては試行錯誤的行動が多く、注意も集中しない方であるが、他方はどちらかというと親和的でなく、課題へのとりくみ方はじっくりと注意を集中するタイプである。この2人の子どもに対する両親の接し方が興味深いものであった。前者の子どもに対しては父母そろって課題解決の際の介入が多く、子どもがうまくできるとややオーバーにほめるが、後者の子どもに対しては課題指向的であるがほとんどを子どもにまかせ、子どもができてあまりほめない。まさに子どもによって、そして子どもをどうみているかによって親の働きかけはちがうという例である。

われわれの研究は一年後に同じ被験者に対して同じ手続きで観察記録をとっており、短期縦断研究として経年的変化も分析する予定である。また父母子の相互作用に及ぼす親の側の要因、子どもの側の要因、親子の相互作用の系列的効果についても現在分析中である。

〔要 約〕

父母子の相互作用を半構造化された実験室場面で見守り、父子および母子の相互作用の特徴をさぐることを目的とした。対象は幼稚園年中組に在園中の子どもとその父母で、男児7名、女児9名(但し女児2名は二卵性双生児)計16名である。平均年齢は5歳2か月である。手続きは、父母と子どもの3人で大学のプレイルームに来てもらい、三つの課題場面と一つの自由遊び場面を設定し、父母の了解を得て一方視窓からビデオカメラで撮影した。三つの課題場面は父親中心で教える条件と母親中心で教える条件と父母が共同で教える条件である。用いた課題は、ハノイの塔、モンテッソーリの二項式ブロック、およびレゴ・ブロックである。自由遊びは箱庭による砂場遊びである。

結果の分析はVTRに録画された父母子の行

動を評定することによって行なった。付録資料の行動評定尺度は三宅（1982）らの尺度をもとに追加・修正を行なって作成したものである。

父母子の相互作用は課題材料や父母のどちらが主導的役割をとる場面であるかによって異なっていた。父母の両者とも主導的役割をとる場面を比較すると、父親の方がより課題指向的で、介入・干渉傾向が強く、子どもの作業に対して指図したり、指示したりして課題遂行をはかろうとする。ところが母親の方は指示のしかたが精密コード的でなく「よく（お手本を）見なさい」とくり返したりする制約コード的な発言が多い。父母の両者が補佐的役割をとる場面を比較すると、母親の方が父親にくらべて干渉する

傾向がやや多いが、子どもを批判することは少ない。また相手が中心になって教える課題であるのに、自分の方が主導権をとる傾向は父親に多くみられた。

12の行動評定項目について父親と母親の行動を比較すると、相違点は比較的少なく、類似点が多かった。子どもの方の反応は課題場面で中心になって教えてくれる親への応答性が高いのは当然であるが、父母が一緒に教えてくれる条件下や自由あそび場面では両者に同じ程度に回答する子どもが多かった。父母子の相互作用に影響すると考えられる親の子ども観、信念、価値観、子どもの気質、生育歴等の要因についての分析は続行中である。

付表1 四場面における父親および母親の行動評定の平均値とS. D.

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ハノイの塔	父親	M	5.16	2.78	5.44	5.90	5.44	4.88	1.94	5.50	4.69	3.06		3.00
		S D	1.16	0.99	1.07	0.32	0.50	1.15	1.01	0.95	0.90	1.33		0.89
	母親	M	4.81	3.63	5.00	5.88	4.97	4.69	1.56	4.44	4.40	3.19	4.19	2.84
		S D	1.26	1.33	1.02	0.38	1.18	1.20	0.46	1.14	1.09	1.14	1.63	0.88
二項式	父親	M	4.34	4.03	5.25	5.81	4.75	4.19	2.44	4.69	4.63	3.25	3.41	3.06
		S D	1.14	1.15	0.59	0.56	0.68	1.20	1.40	0.79	1.01	1.21	1.35	0.92
	母親	M	5.16	3.53	5.63	5.72	5.25	4.41	2.28	5.72	5.28	3.22		2.94
		S D	0.38	1.48	0.67	0.53	0.59	1.15	1.37	0.53	0.59	1.13		0.73
レゴ・ブロック	父親	M	5.16	3.03	5.28	5.97	5.41	4.25	2.69	5.38	4.94	3.16	3.88	3.25
		S D	0.78	1.15	0.50	0.28	0.59	1.13	1.27	0.84	0.61	1.03	0.28	1.06
	母親	M	5.06	3.28	5.22	5.94	5.00	4.12	2.53	5.28	5.25	3.31	3.78	3.16
		S D	0.61	1.25	0.59	0.30	0.64	1.07	1.26	0.92	0.68	1.22	0.39	1.04
砂場	父親	M	4.44	3.34	4.94	6.03	5.16	4.25	2.47	3.22	3.63	3.09	3.63	3.17
		S D	0.98	1.26	0.77	0.12	0.55	0.85	1.23	1.37	1.15	0.89	0.52	0.91
	母親	M	4.19	3.63	4.75	6.03	4.94	4.22	2.44	3.16	3.56	2.91	3.63	3.09
		S D	0.93	1.38	0.94	0.12	0.63	1.09	1.01	1.34	0.93	0.99	0.67	0.77

付表2 四場面における子どもの行動評定の平均値とS. D.

		1	2	3	4	5	6	7		8	9	10
								父親	母親			
ハノイの塔	M	4.41	4.81	4.03	4.94	4.81	3.81	5.13	4.47	4.72	4.59	4.81
	S D	1.48	1.40	1.43	1.66	1.41	1.22	0.99	0.78	1.36	1.11	0.92
二項式	M	4.47	4.84	4.00	5.28	5.13	4.19	4.72	5.44	5.16	4.69	4.59
	S D	1.24	1.21	1.72	0.90	1.26	1.14	0.77	0.58	0.91	0.85	0.75
レゴ・ブロック	M	4.78	4.84	4.19	5.09	5.78	3.59	4.97	4.81	4.97	5.16	5.00
	S D	0.95	1.09	1.20	1.23	0.53	1.33	0.93	0.90	1.15	0.70	0.70
砂場	M	4.09	5.53	4.97	5.63	6.13	5.31	5.03	4.94	5.19	5.09	5.53
	S D	0.47	0.86	0.67	0.76	0.45	0.85	0.99	0.90	0.88	0.63	0.78

課題場面における行動評定項目

親の行動評定尺度

(1) 課題達成への圧力

1 → 子どもの出来ばえに対しても、その途中のやり方に対しても全く頓着しない。子どもによりよいものあるいはより早くといった目標に向かわせるような働きかけ（動作、言葉）は一切行わない。

4 → 時折時間を気にして、急がせるように示唆したり、励ますことはあるが、それほど強いものではない。

7 → たえず時間を気にして、このセッションの間じゅう一刻も休むことなく子どもをせきたてたり、激励したり、圧力をかけたりする。

（ただし、圧力のかけ方の巧拙は問わない。）

(2) 介入、干渉傾向の少なさ

1 → たえず子どもの行動に対して指図したり、指示を与えて、統制したり、介入したり、時には中断させたりもする。

4 → 時々、指図したり示唆したりするが、子どもが現在していることを中断させるほど強いものではない。

7 → 子どものすることに対して全く干渉や介入をしないばかりか、adviceや示唆を与えることもしない。

(3) 配慮

1 → 子どもの能力、動機、興味に無頓着に子どもに接する。親のあらゆる働きかけは、このような子どもの内的状態とは無関係になされるために、ギクシャクしたり、ピント外れが目立ったり、タイミングがズレていることが大部分である。

4 → 時々ピント外れなことを言ったり、タイミングがズレたadviceをしたりするが、子どもの活動を妨げることはない。

7 → 子どもの能力、動機、興味に十分配慮して子どもの活動が促進されるような働きかけをする。子どもが行き詰ったり、気乗りしない時でも、子どもをうまく誘導する。

(4) リラックス

1 → 完全に堅くなって、表情がこわばったまま終始したり、動作や態度が全くギコチない。

4 → 開始から2～3分は少し緊張の素振りを見せるが、その後は時々カメラを気にする程度である。

7 → 開始当初から全くくつろいでおり、表情や動作が自然で屈託がない。実験室でVTRを撮っていることを全く感じさせない。

(5) 援助

1 → 子どもが完全に行き詰ったり、途方にくれてしまってぼんやりしている時でも、何か教示したり、忠告してあげたり、心理的support（受容や励まし）をするなどして、子どもに援助することがない。

4 → 子どもとのやりとりの中で、たずねられたりすると、すぐに、それに答えたり、また、自分の方でも時折教示や示唆をすることがある。

7 → 明らかに不必要であったり、時には子どもの活動の促進を妨げることすらあるような場合でも、たえず忠告や教示を行なう。子どもから求められてそうすることとは、むしろ例外的なほどである。

(6) 賞賛

1 → 子どもとのやりとりの中での軽い承認や受容の合図（首でうなずく、ウンと返事など）以外には、このような言動はみ

られない。

4 → 子どもが目立った何かをした時や、子どもから注目するよう促された時には、いつでもほめたり受容する。しかし、自発的にそうすることは少ない。

7 → 客観的には、敢えてほめる必要がないような些細なことに対しても、それを取りあげて、たえずほめたり、受容する。ほめ方が大方の人には不自然に思われるほどである。

(7) 批判

1 → 子どもとのやりとりの中での軽い批判やnegative feed-back（「お母さんはそうは思わないな」「ほんとう？」などの）、ふざけて批判することを除けば、子どもを責めたり、叱ったりすることは全くない。

4 → 子どもが明らかにしくじったり、目立つような逸脱行為をした時には、批判したり叱ったりする。しかし、ちょっとした失敗には軽い批判だけでいることが多い。

7 → 客観的にいえば、批判や叱責の全く必要のないようなことに対して見逃さず、必らずそれを取りあげては叱ったり、批判したりする。

(8) 親のパフォーマンス機能（精密コード的な課題指向）

1 → 子どものやりたいようにやらせて、ほとんどまかせてしまう。

4 → 時折、子どもに課題解決のための具体的な指示を与える。

7 → たえず子どもに考えさせたり、ヒントを与えたり、モデルを示しまちがっていたら介入して修正し、論理的説明を加えたりして子どもの行動をチェックしていく。課題解決のために具体的指示を与えていく。

(9) 親の行動統制機能（制約コード的な課題指向）

1 → 子どものやりたいようにやらせるし、やらなくても黙認してしまう。

4 → ゆるやかな命令、子どもが従わなくても強制せず譲歩する。1回説得はするがあとは放任する。

7 → 課題解決のための具体的な指示でなく、課題に向う態度について指示する（がんばれ、見なさい、しっかりしなさい、お願いだからちゃんとやって）。

(10) 親のメンテナンス機能（情緒的関与）

1 → 成功した時はきちんと賞めるが、失敗しても決して叱らないばかりでなく、はげまし、共感し、なぐさめる。

4 → 成功した時はほめ、失敗した時は注意するがそれほど強いものではない。

7 → 成功しても賞めるなどの強化は一切しないばかりか、失敗をした場合は厳しく叱責（負の強化）を与える。

(11) 親の主導性（介入度）

1 → 一方の親が中心の課題であるのに、従の方の親がリーダーシップをとるほど介入する。（レゴ・ブロックおよび箱庭場面：一方の親の存在を無視して子どもに働きかける。）

4 → 一方の親の主導性を尊重するが、時折、口をはさむ。

7 → 自分が中心に教える課題でないときはだまってみている。（レゴ・ブロックおよび箱庭場面：一方の親のやる通りにして、自分の考えをおさえてしまう。）

(12) 父母の協力度

1 → 一方の親の考え方を常に支持し、それに応じた発言や行動をするなど、協力しようとする姿勢がみられる。

4 → 一方の親の子どもに対する指示に不十分さを感じた時だけ自分の意見をいう。

7 → 一方の親の発言に常に反対したり、批判したりするなど、協力しようとする姿勢がみられない。

子どもの行動評定尺度

(1) 熟慮的行動

- 1 → あれこれと考えるより先に手の方が動いてしまう。完全に trial & error 式に行動が展開し、途中で「あ?！」と絶句して、やり直すようなことが多い。
- 4 → はじめはモデルをよく見て慎重だが、だんだん複雑になってくると、思考停止したり、試行錯誤的になることもある。
- 7 → 頭の中での plan に沿ってなされるようである。たえずブツブツといたり、「エート、そうだ、そうだ。」などと自己 feedback したりする。

(2) 好奇心の旺盛さ

- 1 → この場面に全くおもしろさや楽しさを感じない素振りである。ただ親の指図にしたがっているだけである。
- 4 → しかたなくやっているわけではないが、強い興味を示しているようすはみられない。
- 7 → この場面に強い好奇心をもち、親が説明している間も、早く自分でやりたくて仕方がないようすであり、質問したりする。

(3) 自信

- 1 → 自分の行動には、常にためらいがみられ、いつもおそおそとしている。
- 2 → 少しむずかしいことにぶつかると心配そうな素振りを見せる。
- 7 → とりかかったことは必ずできると信じているかの如くふるまう。めんどろな事態になっても、ためらいや不安は全くない。

(4) 持続的注意

- 1 → すぐに気が散ってしまって、ひとつのことに 2～3 分以上続けて従事することができない。
- 4 → 興に乗ってくると 4～5 分ぐらい続行できるが、少しむずかしくなると中断す

ることが多い。

- 7 → 一旦はじめるとそこに没頭して、セッションの間じゅう完全に注意はこのことに注がれる。作業の中断（手の休まること）はあっても、思考のそれはない。

(5) リラックス

- 1 → 終始はりつめたような堅い表情や素振りである。
- 4 → 開始当初は幾分動作や表情にぎこちなさがあるが、2～3 分たつとなれてくる。
- 7 → 開始当初から全くくつろいでいて、動作や表情が全く自然である。

(6) 自立性

- 1 → きわめて親に依存的であり、些細なことでもすぐに親に指示や教示を求める。（客観的にはその必要が全くないような事態でもそうする。）
- 4 → 少し困難なことに出合うと、親に助けを求めるが、それ以外では、自分の力でしようとすることが多い。
- 7 → 自分の力でできることを証明しようとするようである。明らかに助けを必要とする事態でも自分から助けを求めることはしない。その申し出がなされても拒むことがある。

(7) 親への応答性

- 1 → 親の言動に全く応じない。親の全ての働きかけを無視し、あるいは無頓着に行動する。
- 4 → 親からの反応を要求するような働きかけ（疑問、命令など）にほとんど応ずるが、必ずしも反応を要求しないような働きかけに対しては時々無視する。
- 7 → 反応を要求しないような働きかけに対してもよく応じる。（ただし、この場合、positive に応じるとか、negative に応じるかは問わない。）

(8) 積極的な取り組み傾向

- 1 → この場面では全く気乗りしない様子で

ある。いかにも、イヤイヤながら、ただおざなりにやっているという感じ。

4 → 時々おもしろがったり、親に励まされたり、ほめられたりすると活気やる気をみせることがあるが、それほど長続きしない。

7 → とても乗り気で、おもしろくて、楽しくてしょうがないという感じ。このセッションの間じゅう本当にいきいきとすごす。

(9) 積極的親利用

1 → わからないことがあっても、なかなか親に教えることができないで苦労する。

4 → わからないことがあると、時には親の指示を求める。

7 → わからないことがあれば、積極的に親に質問するが、理解すると自分独自の力でやろうとする。

(10) 親和傾向

1 → 親との交流を楽しむというところは全

くみられない。

4 → 課題解決に当って、親との交流も楽しんでる。

7 → 課題を通して親との交流を楽しむことが中心になっている。

.....

注) この行動評定項目は、「幼児の発達と親子関係の生態学的・縦断的研究（昭和56年度科学研究費補助金による研究成果報告書の付録資料7：研究代表者 三宅和夫）に準拠して作成されたものである。但し、親の行動評定尺度の(1)～(7)までは、原尺度のままであるが(8)～(12)までは今回新しく作成されたものである。子どもの行動評定尺度については、三宅らの尺度が、レゴ・ブロック課題場面における行動評定項目として作られており、われわれの用いた場面の行動評定項目としてはふさわしくない記述があるため、部分的に修正してある。特に(1)熟慮的行動と(2)好奇心の旺盛さについては、文章を削除または修正してある部分が多い。また、(9)と(10)は新たに作成した項目である。

父母の養育態度と達成行動

— C C P による分析 —

青 柳 肇

〔目的〕

達成動機が親の養育態度に規定されていることは、良く知られている (Winterbottom M.R. (1958), 宮本美沙子ら (1968),)。しかし, そこでは, 主として母親だけの養育態度を扱っていて, 父親のそれについては検討されていない。筆者ら (青柳肇ら (1983), 細田一秋ら (1983)) は, 両親の達成動機・親和動機と幼稚園児のそれらの動機との関連を検討したが, 明確な関連はみられなかった。また, 両親の達成動機・親和動機・達成的しつけ, 親和的しつけ, 親和行動と子どもの達成動機を検討した研究

(青柳ら (1986)) では, 父親も母親も, 達成的しつけが強いと子どもの達成動機が弱い傾向が, また父親の親和行動が強いと子どもの達成動機が弱い傾向が各々みられた。

筆者らの研究は, 父親を含めた親の養育態度を検討したものであるが, そうした養育態度を子どもがどのように受けとっているかは扱っていない。親の養育態度を子どもがどのように認知するかは, 子どもの達成行動の強化として作用すると思われる。そこで, 本研究では, CCP (Children's Cognition of Parents) に類似した図版を試み的に作成し, その反応と達成行動との関連を検討することを目的とした。

なお, その際, 達成行動に関連するのは, 既存のCCPが測定する受容-拒否という視点より, 強化の種類と考えられる。そこで, CCPの反応から, 強化の種類を分類し, それに応じて両親の間の相違もあわせて検討することとした。

〔方法〕

1. 被験者 千葉県下の私立幼稚園, 年長児 (5~6歳) 男児23名, 女児18名, 計41名

2. 手続き

① C.C.P.図版の作成

子どもの認知する親の養育態度を測定するにあたって, 既存のCCPに類似した図版を試み的に作成した。成功状況 (絵が上手に描けた場面ときらいなおかずを食べられた場面) と失敗状況 (おもちゃをこわしてしまった場面とミルクをこぼしてしまった場面) 各々2場面を設定した。各々について, 男女児別, 父母別としたので, 合計16場面である (図1参照)。但し, 被験児の性に合わせて, 使用したので, 実際には8場面で実施する。

② C.C.P.の測定

ラポート形成後, 上記の8枚の図版を子どもの性にに応じて提示し, 各状況で, 父親と母親が, どのように反応するか自由回答させた。

③ 達成動機の測定

達成動機は, 次の4課題で測定した。

(イ) ビーズ課題 (以下, B.T.と記す)

Veroff, J. (1969) の方法を参考にし, 筆者らが独自に作成した。球形で中心に穴のあいた四色 (白, 赤, 黄, 緑) の木製ビーズを台のついた棒に通し, 5秒間提示し, 隠した後, 台のついた棒とばらばらにされたビーズを示して, 同一のものを再生させて, 作らせた。課題は6水準あり, 次第にビーズの数が増え難しくなっていく

容易な課題から順番にやらせ、二度連続して失敗した時点で終了する。その後、次の4水準の課題を提示し、再度やりたい課題を選択させた。

- a) 最初の最も容易な課題
 - b) 最後に成功した課題
 - c) 最初に失敗した課題
 - d) 二度目に失敗した課題
- (ロ) マーブル・ゲート課題（以下、M.G.T.と記す）

ボール紙を折り曲げて作成したゲートに、スタートラインからおはじきを指ではじかせ、通過させた。課題は6水準あり、ゲートが次第に狭くなり難しくなっていく。ゲートの幅は、12cm、9cm、7cm、5cm、3cm、2cmである。スタートラインからゲートまでの距離は、標準を15cmとしたが、各被験児のはじく能力に応じて、変化した。その能力は、予備試行により決定された。

二度連続して失敗した後、B.T.と同様、四水準の課題を再提示し、再度挑戦したい水準の課題を選択させた。

- (ハ) ピクチャーメモリー課題（以下、P.M.T.と記す）

Veroff, J. (1969)の方法を参考にして筆者が作成した。B4版の画用紙に幼児がよく知っていると思われる事物を描いた。課題は6水準あり、描かれた事物の数が次第に増えていく。（図2）図版に描かれた事物の名称を口頭で同定させ、未知のものでないことを確認させてから、5秒間提示し、隠してから何が描かれていたか再生させた。

上記の2課題同様、2度連続して失敗した後、4水準の課題を提示し、再度挑戦したい水準の課題を選択させた。

- (ニ) チップ・スロー課題（以下、C.T.T.と記す）

10cm×12cm×11.5cmのプラスチック製のかごに、ボーカーチップを投げ入れさせた。課題は7水準あり、投げる地点からの距離が、20cm、30cm、42cm、56cm、74cm、90cm、114cmと次第に遠くなっていく。

各水準で3個のボーカーチップを与え、2個以上入った場合、成功とみなした。ここでも、2度連続して失敗したら課題を終了し、4水準の課題のなかから、再度挑戦したい水準の課題を選択させた。

〔結果と考察〕

1. C.C.T.の分析

C.C.T.は、既存の受容-拒否といった視点からではなく子どもの達成行動に関係する強化といった側面から分析することとした。

そこで、子どもの認知する親の反応の全回答を、成功事態と失敗事態別にK・J法により分類した。表1と表2は、各々成功事態と失敗事態での強化の種類と具体例を示したものである。こうした回答を基礎にして、強化の種類をまとめ直した。表3は正強化と負強化別にそれを示したものである。具体的強化とは、「成功事態や失敗事態での子どもの行為そのものに対して具体的に強化を与えるもの」である。抽象的強化とは、「子どもの行為に直接強化を与えるのではなく、知的・人格的・社会的な強化を与えるもの」である。主観的強化とは、「親の感情を示すとか子どもの感情を親が推測して反応するといった強化の与え方をするもの」である。外的強化とは、「主として物によって強化を与えるもの」で、負強化の事例はみられなかったが、あるとすると好ましい外的強化を剥奪するものが含まれる。無強化は「全く強化を与えないもの」であり、成功事態では、その行為を促進させるとか、失敗事態では、理由を聞くなどもこの中に含めた。

表4は、各場面毎の各強化の出現度数と百分率及び両親間の反応の相違を χ^2 検定したものである。成功事態では、有意差のみられたものはないが、有意な傾向がみられたのは、絵の場面である。この場面では、抽象的強化は母親が、主観的強化は父親が多い傾向がある。

失敗事態では、ミルクの場面の両親間に1%水準で有意差がみられた。抽象的強化では母親が、無強化では父親が多い。また、ミルク場面では、主観的強化と外的強化が全くみられないのが特徴である。

成功事態でも失敗事態でも、一貫した傾向として抽象的強化が多いことがあげられる。

2. C.C.P.と達成行動との関連

達成行動については、Atkinson J. W. (1966)のモデルに従い、4水準の課題選択に次のように得点を与えた。

- 最も容易な課題……………1点
- 最後に成功した課題……………3点
- 最初に失敗した課題……………4点
- 2度目に失敗した課題……………2点

Atkinson J. W.のモデルに従えば、2度目に失敗した課題は、最も容易な課題と同じ得点が与えられるはずであるが、この年代の子どもの特性として、より高い成功予測をするという結果 (Schneider K. (1984)) から、上記のように一部修正した。

C.C.P.の反応と達成行動得点の関連を検討するため、達成行動得点を平均で二分割し、高得点のものをH群、低得点のものをL群とした。両群におけるC.C.P.の各場面の各強化の度数と百分率及びその相違を χ^2 検定したのが表5である。

両群間に有意差のみられた場面はなかった但し、ビーズ課題では成功事態のおかず場面の父親の反応に有意差のある傾向がみられた。すなわち、この場面のH群の父親はL群の父親より具体的強化が多く、抽象的強化や無強

化が少ない傾向がみられる。こうした傾向は、数値上だけから考慮すると全般的にも言えそうである。事態別にみると、成功事態では抽象的強化がL群の方が多い。特に父親ではその傾向が顕著である。また失敗事態では、両親ともそうした傾向はみられない。具体的強化は、成功事態でも失敗事態でも、また両親とも、H群の方がL群より高くなっている。図3は、H群とL群の各強化の出現率のうち、典型例を示したものである。

これらのことから、子どもの達成行動を促進する要因として、父親も母親も、どのような事態でも具体的強化が有効であるのに対して、抽象的強化・無強化は、大きな影響を及ぼさないことが示唆される。

ここでは、子どもの認知する親の養育態度を検討したが、今後、現実の親の養育行動とC.C.P.の反応との相違についても検討する必要があるだろう。

〔要約〕

本研究は、父親と母親の養育態度の子どもの認知と子どもの達成行動との関連を検討した。被験者は、幼稚園年長組の男女計41名である。子どもの認知する親の養育態度の測定は、既存のC.C.P.のテストを参考にして、独自に作成した。成功事態と失敗事態に各々2場面とし、父母別にしたので、計8場面について測定した。

達成行動については、ビーズ課題、ピクチャーメモリー課題、マープルゲート課題、チップスロー課題の4課題で測定した。各課題とも、容易な課題から徐々に困難な課題に移行して与えていき、2度連続して失敗した後、次の4水準の困難度の課題を提示し、再度挑戦したい課題を選択させた。①最初の最も容易な課題、②最後に成功した課題、③最初に失敗した課題、④2度目に失敗した課題。各水準の課題への達成行動得点の配点は、①…1点、②…3点、③…4点、④…2点とした(おおむね Atkinson

モデルに従った)。

C.C.P.の分析は、筆者らが独自に強化の指点から分析することとした。強化は、具体的強化、抽象的強化、主観的強化、外的強化、無強化の4種類とした。

主な結果は、以下のとおりである。

- ① 成功事態の絵の場面では、抽象的強化は母親が、主観的強化では父親が、各々多い傾向がある。
- ② 失敗事態のミルクの場面では、両親間に有意な差がみられ、抽象的強化では母親が、無強化では、父親が各々多い。
- ③ 成功事態、失敗事態とも、両親ともに一貫した傾向として抽象的強化が多い。
- ④ 達成行動得点のH群とL群の間で、C.C.P.反応に有意な差はみられなかったが、ビーズ課題では、成功事態のおかず場面の父親の反応に有意差の傾向がみられ、H群では、L群より具体的強化が多く、抽象的強化や無強化が少ない。こうした傾向は、数値上は、一般的傾向と考えても良いように思われる。

参 考 文 献

- 青柳肇ら(1983)
幼稚園児と両親の達成動機・親和動機の研究(その1)——園児の動機を規定する要因——家族関係の研究 31-45, 社会福祉法人真生会 社会福祉研究所
- 青柳肇ら(1986)
達成動機・親和動機の育成に関する親の養育態度について。母子研究No.7 30-43, 社会福祉法人真生会 社会福祉研究所
- Atkinson J. W. et al (1966)
A theory of achievement Motivation.
Wiley
- 細田一秋ら(1983)
幼稚園児と両親の達成動機・親和動機の研究(その2)——両親と園児との動機特性の関連——家族関係の研究, 46-60, 社会福祉法人真生会 社会福祉研究所
- 宮本美沙子ら(1968)
達成動機の育成とその規定因, 日本教育心理学会宿題報告, 人格形成の経験的基礎, 61-88
- Schneider K. (1984)
The cognitive basis of task choice in preschool children.
In J. Nicholls (Ed.) "Advances in Motivation and Achievement" Vol. 3
"The Development of Achievement Motivation" P. 57-72
- Veroff J. (1969)
"Social Comparison and Development of Achievement Motivation,"
In Smith C.P. (Ed.) "Achievement Related Motives in Children," 46-101, Russell Sage Foundation, New York
- Winterbottom M. R. (1958)
The relation of need for achievement of learning experiences in independence and mastery. In Atkinson J. W. (Ed.) Motives in fantasy, action, and society, Van Nostrand, 453-478

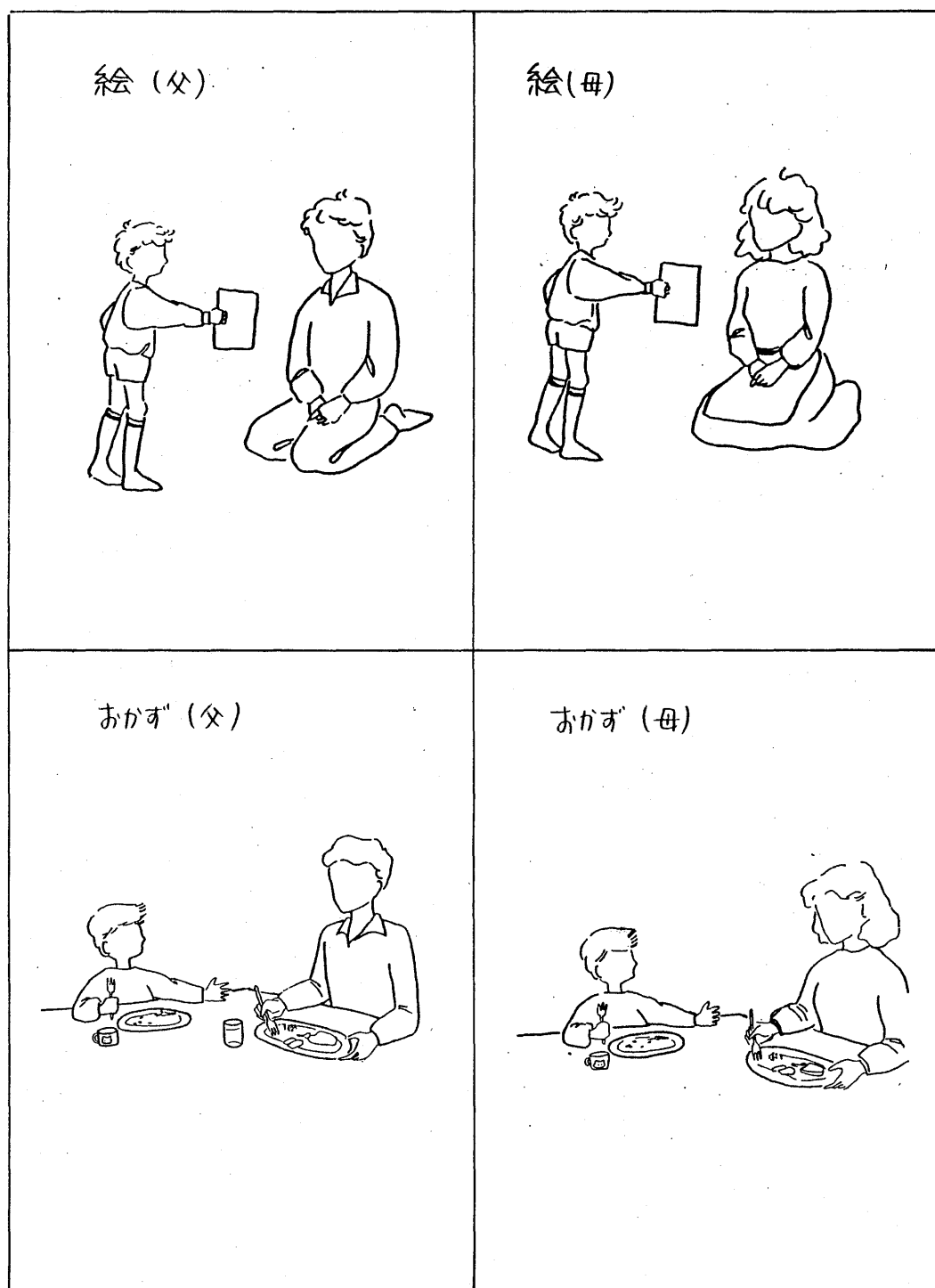


図1 CCP 図版 ① 成功事態 (男児用)

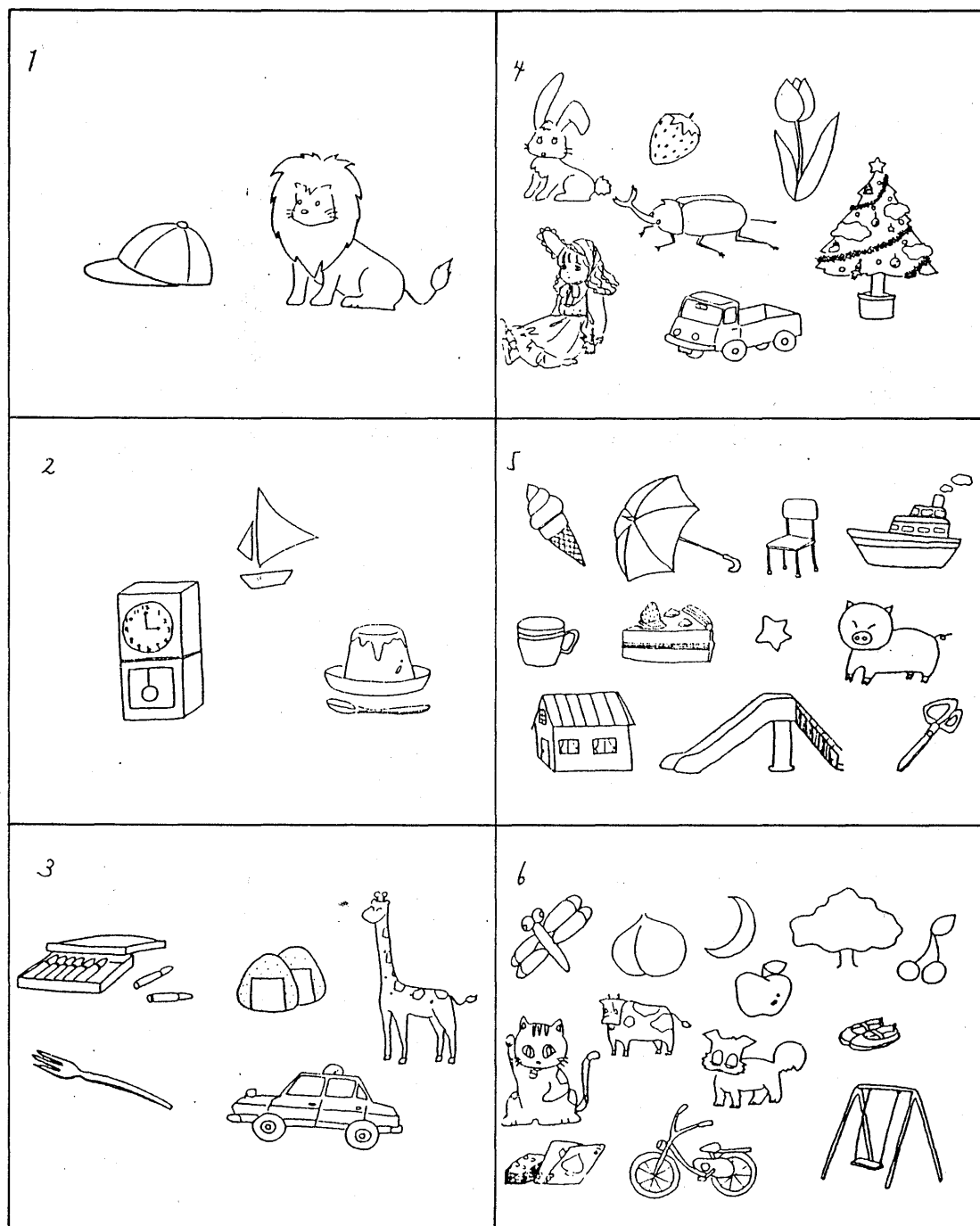


図2 絵画記憶課題 (P. M. T.)

High Low

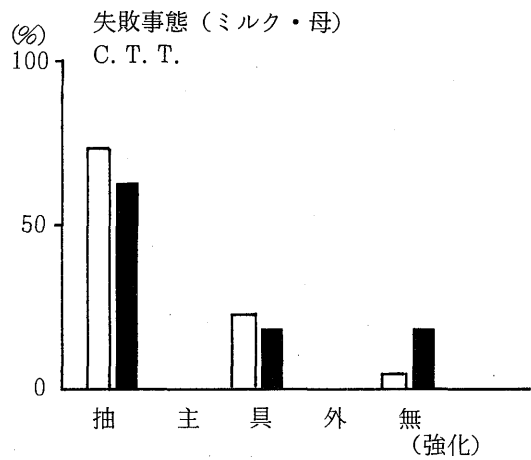
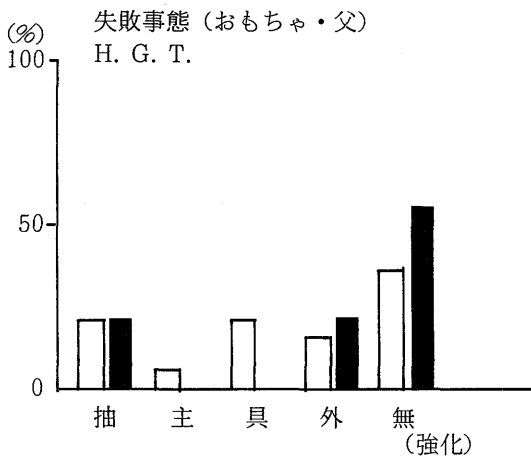
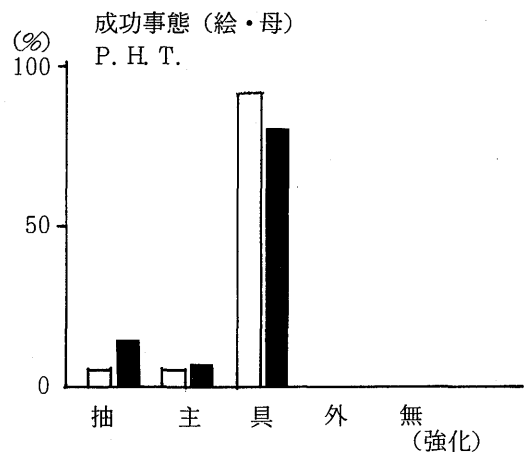
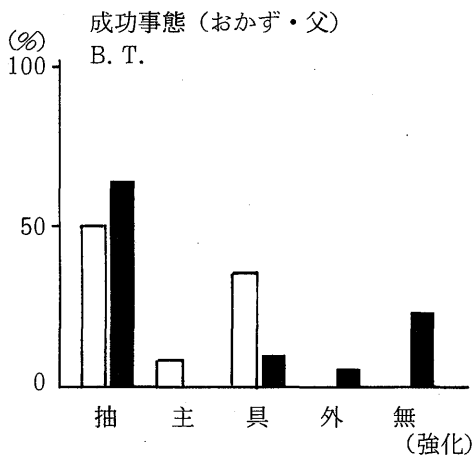


図3. H 群とL 群における各強化の出現率 (典型例)

表1 成功事態での反応例と分類

強化の種類	具	体	例	分類
行		為	よく食べたね, 上手, きれい	具 体 的
モ	デ	ル	ラグビーの選手になれるよ	具 体 的
顕	示	性	貼ろうか, お母さんにも見せてごらん	具 体 的
ほ	め	る		具 体 的
社	会	的	えらいね	抽 象 的
知		的	おりこう	抽 象 的
人	格	的	いい子ね	抽 象 的
親	の 感	情	ありがとう, うれしい	主 観 的
子どもの感情の推測			よかったね	主 観 的
代		償	おもちゃを買ってあげる	外 的
無		言	何もいわない	無 強 化
行	為	促	もっと食べなさい	無 強 化
行	為	の 追 認	おかわりする	無 強 化
そ	の	他	わからない, 無答	無 強 化

表2 失敗事態での反応例と分類

強化の種類	具 体 例	分 類
責任をとらせる 次回への行動指針 理由を聞いて叱責 怒る 理由なき叱責 経済的理由 理由を聞く 行為の追認 大人の援助 あきらめ 慰め 無言 その他	片づけなさい, 直しなさい ふきなさい 今度からやっちゃだめよ, 気をつけるんだよ 「どうしてやったの?」と怒る こら! いけません もったいない どうしたの こわしちゃったの, こぼしちゃったの 直してあげる, ふいてくれる しょうがないね なにも言わない 無答	具体的 具体的 具体的 抽象的 抽象的 主観的 無強化 無強化 無強化 無強化 無強化

表3 各強化の定義と正強化・負強化の例

強化の種類	定 義	正強化の例	負強化の例
具体的強化	成功事態や失敗事態での子どもの行為に対して具体的に強化を与えるもの	上手, きれい, よく食べたね	片づけなさい ふきなさい
抽象的強化	子どもの行為に対して直接的にでなく知的, 人格的, 社会的な強化を与えるもの	えらいね お利口 いい子	コラ! いけません
主観的強化	親の感情反応や子どもの感情を親が推測し, 反応するといった強化を与えるもの	すごいね, うれしい ありがとう	もったいない
外的強化	主として物によって強化を与えるもの	おもちゃを買ってあげる	
無強化	強化を与えないもの	おかわりする	どうしたの しょうがないね

表4 各場面での各強化の出現度数と両親の相違 (χ^2)

I. 成功事態

場 面	親	強 化 の 種 類					χ^2
		具	抽	主	外	無	
お か ず	父 親	7 (20.59)	20 (58.82)	1 (2.94)	1 (2.94)	5 (14.71)	4.596
	母 親	4 (11.11)	25 (69.44)	1 (2.78)	0 (0)	6 (16.67)	
絵	父 親	30 (83.33)	1 (2.78)	4 (11.11)	0 (0)	1 (2.78)	+ 4.943
	母 親	33 (86.84)	3 (7.89)	2 (5.26)	0 (0)	0 (0)	

II. 失敗事態

場 面	親	強 化 の 種 類					χ^2
		具	抽	主	外	無	
ミ ル ク	父 親	5 (15.15)	20 (60.61)	0 (0)	0 (0)	8 (24.24)	** 9.690
	母 親	8 (21.05)	27 (71.05)	0 (0)	0 (0)	3 (7.89)	
お も ち ゃ	父 親	4 (12.12)	7 (21.21)	1 (3.03)	6 (18.18)	15 (45.45)	3.162
	母 親	3 (11.11)	8 (29.63)	1 (3.70)	5 (18.52)	12 (44.44)	

注 () 内百分率 + : $P < .10$ ** : $P < .01$

具……具体的強化, 抽……抽象的強化,

主……主観的強化, 外……外的強化,

無……無 強 化

表5 成功事態の各場面におけるH群L群の強化
別度数と百分率及びその相違 (χ^2 検定)

場面	親	課題	群	抽	主	具	外	無	χ^2
お か ず	父	B.T.	H	6 (50.00)	1 (8.33)	5 (41.67)	0 (0)	0 (0)	9.354 ⁺
			L	14 (63.63)	0 (0)	2 (9.09)	1 (4.55)	5 (22.73)	
		M.G.T.	H	12 (57.14)	1 (4.76)	5 (23.81)	1 (4.76)	2 (9.52)	2.544
			L	8 (61.54)	0 (0)	2 (15.38)	0 (0)	3 (23.08)	
		P.M.T.	H	11 (50.00)	1 (4.55)	5 (22.73)	1 (4.55)	4 (18.18)	2.567
			L	9 (75.00)	0 (0)	2 (16.67)	0 (0)	1 (8.33)	
		C.T.T.	H	15 (62.50)	1 (4.17)	6 (25.00)	0 (0)	2 (8.33)	6.029
			L	5 (50.00)	0 (0)	1 (10.00)	1 (10.00)	3 (30.00)	
	母	B.T.	H	6 (50.00)	1 (8.35)	3 (25.00)	0 (0)	2 (16.67)	6.105
			L	19 (79.20)	0 (0)	1 (4.17)	0 (0)	4 (16.67)	
		M.G.T.	H	14 (63.64)	1 (4.55)	3 (13.64)	0 (0)	4 (18.18)	1.314
			L	11 (78.57)	0 (0)	1 (7.14)	0 (0)	2 (14.29)	
		P.M.T.	H	13 (61.91)	1 (4.76)	3 (14.29)	0 (0)	4 (19.05)	1.755
			L	12 (80.00)	0 (0)	1 (6.67)	0 (0)	2 (13.33)	
絵	父	B.T.	H	0 (0)	1 (7.69)	11 (84.62)	0 (0)	1 (7.69)	0.947
			L	1 (4.17)	3 (12.50)	19 (79.17)	0 (0)	1 (4.17)	
		M.G.T.	H	1 (4.55)	4 (18.18)	17 (77.27)	0 (0)	0 (0)	6.440
			L	0 (0)	0 (0)	13 (86.67)	0 (0)	2 (13.33)	
		P.M.T.	H	1 (4.17)	4 (16.67)	17 (70.83)	0 (0)	2 (8.33)	4.676
			L	0 (0)	0 (0)	13 (100)	0 (0)	0 (0)	
		C.T.T.	H	0 (0)	2 (7.69)	23 (88.46)	0 (0)	1 (3.85)	4.131
			L	1 (9.09)	2 (18.18)	7 (63.64)	0 (0)	1 (9.09)	
	母	B.T.	H	1 (6.67)	0 (0)	14 (93.33)	0 (0)	0 (0)	1.472
			L	2 (8.70)	2 (8.70)	19 (82.61)	0 (0)	0 (0)	
		M.G.T.	H	1 (4.35)	2 (8.70)	20 (86.96)	0 (0)	0 (0)	2.233
			L	2 (13.33)	0 (0)	13 (86.67)	0 (0)	0 (0)	
		P.M.T.	H	1 (4.35)	1 (4.35)	21 (91.30)	0 (0)	0 (0)	1.155
			L	2 (13.33)	1 (6.67)	12 (80.00)	0 (0)	0 (0)	
		C.T.T.	H	2 (7.41)	2 (7.41)	23 (85.19)	0 (0)	0 (0)	4.327
			L	1 (9.09)	0 (0)	10 (90.91)	0 (0)	0 (0)	

注 + : $P < .10$ () 内百分率

抽……抽象的強化

主……主観的強化

具……具体的強化

外……外的強化

無……無強化

表6 失敗事態の各場面におけるH群L群の強化
別度数と百分率及びその相違 (χ^2 検定)

場面	親	課題	群	抽	主	具	外	無	χ^2
ミ ル ク	父	B. T.	H.	7 (58.33)	0 (0)	2 (16.67)	0 (0)	3 (25.00)	0.049
			L.	13 (61.90)	0 (0)	3 (14.29)	0 (0)	5 (23.81)	
		M.G.T.	H.	13 (68.42)	0 (0)	3 (15.79)	0 (0)	3 (15.79)	1.783
			L.	7 (50.00)	0 (0)	2 (14.29)	0 (0)	5 (35.71)	
		P.M.T.	H.	14 (63.64)	0 (0)	3 (13.64)	0 (0)	5 (22.73)	0.262
			L.	6 (54.55)	0 (0)	2 (18.18)	0 (0)	3 (27.27)	
		C.T.T.	H.	17 (65.38)	0 (0)	5 (19.23)	0 (0)	4 (15.38)	5.775
			L.	3 (42.86)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (57.14)	
	母	B. T.	H.	10 (71.43)	0 (0)	3 (21.43)	0 (0)	1 (7.14)	1.526
			L.	17 (70.83)	0 (0)	5 (20.83)	0 (0)	2 (8.33)	
		M.G.T.	H.	18 (78.26)	0 (0)	5 (21.74)	0 (0)	0 (0)	5.039
			L.	9 (60.00)	0 (0)	3 (20.00)	0 (0)	3 (20.00)	
		P.M.T.	H.	19 (76.00)	0 (0)	5 (20.00)	0 (0)	1 (4.00)	1.694
			L.	8 (61.54)	0 (0)	3 (23.08)	0 (0)	2 (15.39)	
		C.T.T.	H.	20 (74.07)	0 (0)	6 (22.22)	0 (0)	1 (3.70)	2.256
			L.	7 (63.63)	0 (0)	2 (18.18)	0 (0)	2 (18.18)	
お も ち ゃ	父	B. T.	H.	2 (15.38)	1 (7.69)	1 (7.69)	3 (23.08)	6 (46.15)	2.514
			L.	5 (25.00)	0 (0)	3 (15.00)	3 (15.00)	9 (45.00)	
		M.G.T.	H.	4 (21.05)	1 (5.26)	4 (21.05)	3 (15.79)	7 (36.84)	4.557
			L.	3 (21.43)	0 (0)	0 (0)	3 (21.43)	8 (57.14)	
		P.M.T.	H.	6 (28.57)	0 (0)	4 (19.05)	4 (19.05)	7 (33.33)	7.401
			L.	1 (8.33)	1 (8.23)	0 (0)	2 (16.67)	8 (66.67)	
		C.T.T.	H.	4 (17.39)	1 (4.35)	2 (8.70)	6 (26.09)	10 (43.48)	4.366
			L.	3 (30.00)	0 (0)	2 (20.00)	0 (0)	5 (50.00)	
	母	B. T.	H.	3 (30.00)	1 (10.00)	1 (10.00)	0 (0)	5 (50.00)	4.840
			L.	5 (26.32)	0 (0)	2 (10.53)	5 (26.32)	7 (36.84)	
		M.G.T.	H.	4 (25.00)	1 (6.25)	3 (18.75)	2 (12.50)	6 (37.50)	3.932
			L.	4 (30.77)	0 (0)	0 (0)	3 (23.08)	6 (46.15)	
		P.M.T.	H.	6 (31.58)	0 (0)	2 (10.53)	3 (15.79)	8 (42.11)	2.295
			L.	2 (20.00)	1 (10.00)	1 (10.00)	2 (20.00)	4 (40.00)	
		C.T.T.	H.	5 (25.00)	1 (5.00)	2 (10.00)	3 (15.00)	9 (45.00)	1.006
			L.	3 (33.33)	0 (0)	1 (11.11)	2 (22.22)	3 (33.33)	

注 () 内百分率

抽……抽象的強化

主……主観的強化

具……具体的強化

外……外的強化

無……無強化

青年期における両親への態度に関する 性差、きょうだい差の検討

瀧 本 孝 雄

1. 目的

本研究は青年期における父親および母親に対する態度に関して、次のような点から検討する。

- (1) 父親および母親に対する態度
- (2) 父親・母親の態度に対する評価
- (3) 父親・母親に対する満足度
- (4) 家族とのつきあいかた
- (5) 自分の家に生まれたことについて
- (6) 父親・母親と話し合う程度
- (7) 家庭生活の満足度
- (8) 両親への相談
- (9) 性格との関連

以上の点に関して質問紙を用いて調査し、青年期における両親への態度に関して考察し、さらに性差ときょうだい順位による差を検討した。

2. 方法

被験者は大学生男子94名、女子169名、計263名である。

調査は以下に述べる質問紙と、MPI（モーゼレー・パーソナリティ・インベントリー）により実施した。

集計に関しては、まず男女に分け、さらに男女ともにきょうだい順位として、(上)、(下)、(一人)の三グループに分類した。(上)は、2人以上のきょうだいで最も上のものであり、(下)は、2人以上のきょうだいで、(上)以外のものである。また(一人)は一人っ子のものである。(下)は、本来、中間子と末子に分けるべきであるが、今回はデータ数の関係で分けていない。

質問紙の内容は次の通りである。

- (1) 次の文章を読んで、はいには○、いいえに

は×を()の中に記入して下さい。

1. 父親を尊敬している()
2. 父親を信頼している()
3. 父親に甘えたい()
4. 父親にしかってほしい()
5. 父親にかくしごとをしたことがある()
6. 父親と何かの問題で対立したことがある()
7. 父親の自分に対する態度に満足している()
8. 父親から体罰を受けたことがある()
9. 父親からよく注意される()
10. 父親は子どもの教育などに関して自信のある態度をとっている()
11. 父親にうそをついたことがある()
12. 結婚する時父親の同意をもとめる()
13. 父親から期待されている()
14. 将来の問題について父親に相談したい()
15. なるべく父親の意見には従いたい()
16. 何か困った時は父親に相談したい()
17. 私の父は、家庭よりも仕事を大切にしている()
18. 私の父は、仕事よりも家庭を大切にしている()
19. 私の父は、私に対して厳しい()
20. 私の父は、まるで私の友人のようである()
21. 私の父は、子どものしたようにさせる()
22. 私の父は、自分の考えに従わせようとする()
23. 父が年をとったら一緒に暮らしたい()

24. どちらかというと、母親よりも父親の方が好きである（ ）
25. 父に何となく憎しを感じる時がある（ ）
26. 父は立派だと思う（ ）
27. 父に愛着を感じる（ ）
- ① 母親を尊敬している（ ）
- ② 母親を信頼している（ ）
- ③ 母親に甘えたい（ ）
- ④ 母親にしかってほしい（ ）
- ⑤ 母親にかくしごとをしたことがある（ ）
- ⑥ 母親と何かの問題で対立したことがある（ ）
- ⑦ 母親の自分に対する態度に満足している（ ）
- ⑧ 母親から体罰を受けたことがある（ ）
- ⑨ 母親からよく注意される（ ）
- ⑩ 母親は子どもの教育などに関して自信のある態度をとっている（ ）
- ⑪ 母親にうそをついたことがある（ ）
- ⑫ 結婚する時、母親の同意をもとめる（ ）
- ⑬ 母親から期待されている（ ）
- ⑭ 将来の問題について母親に相談したい（ ）
- ⑮ なるべく母親の意見には従いたい（ ）
- ⑯ 何か困った時、母親に相談したい（ ）
- ⑰ 私の母は、家庭よりも仕事を大切にしている（ ）
- ⑱ 私の母は、仕事よりも家庭を大切にしている（ ）
- ⑲ 私の母は、私に対して厳しい（ ）
- ⑳ 私の母は、まるで私の友人のようである（ ）
- ㉑ 私の母は、子どものしたいようにさせる（ ）
- ㉒ 私の母は、自分の考えに従わせようとする（ ）
- ㉓ 母が年をとったら一緒に暮らしたい（ ）
- ㉔ どちらかというと、父親よりも母親の方

が好きである。

- ㉕ 母に何となく憎しを感じる時がある（ ）
- ㉖ 母は立派だと思う（ ）
- ㉗ 母に愛着を感じる（ ）
- (2) 次にあげられた項目について、あてはまると思うものは「はい」、あてはまらないと思うものは「いいえ」に○をつけて下さい。
1. 父は、私に対してあたたかい
2. 父は、私の気持ちをわかろうとしている
3. 父は、私にきびしい
4. 父は、何かにつけて、私の行動（やること）に口をはさむ
5. 父は、何かにつけて、自分の考えを押しつけようとする
6. 父は、私に期待をかけすぎている
7. 父は、私をきょうだいや他の人にくらべたがる
8. 父は、おこっても、あまりこわくない
9. 父は、たよりがいがある
10. 父は、わがままである
11. 父は、がんばりやである
12. 父には、友だちが多い
13. 父は、私といっしょに外出したり遊んでくれることがある
14. 父は、いつも夜おそくならないと帰ってこない
15. 父は、母を愛している
- ① 母は、私に対してあたたかい
- ② 母は、私の気持ちをわかろうとしている
- ③ 母は、私にきびしい
- ④ 母は、何かにつけて、私の行動（やること）に口をはさむ
- ⑤ 母は、何かにつけて、自分の考えを押しつけようとする
- ⑥ 母は、私に期待をかけすぎている
- ⑦ 母は、私をきょうだいや他の人にくらべたがる
- ⑧ 母は、おこっても、あまりこわくない

- ⑨ 母は、たよりがいがある
- ⑩ 母は、わがままである
- ⑪ 母は、がんばりやである
- ⑫ 母には、友だちが多い
- ⑬ 母は、私といっしょに外出したり遊んでくれることがある
- ⑭ 母は、いつも夜おそくならないと帰ってこない
- ⑮ 母は、父を愛している
- (3) お父さんが、あなたにもっている気持や、あなたとのつきあい方などを考えてみて、あなたはお父さんに満足していますか。それとも不満ですか。
1. 満足している
 2. やや満足している
 3. どちらともいえない
 4. やや不満である
 5. 不満である
- (4) お母さんが、あなたにもっている気持や、あなたとのつきあい方などを考えてみて、あなたはお母さんに満足していますか。それとも不満ですか。
- (回答欄は(3)と同様)
- (5) あなたの、ふだんの生活やご家族のことなどについて、次の中であてはまるものに○をつけて下さい。○はいくつでもかまいません。
1. 私は家の仕事や家事をよく手伝う
 2. 私は家では、自分の部屋にひとりであることが多い
 3. 私は父にさからったり、口ごたえすることがよくある
 4. 私は母にさからったり、口ごたえすることがよくある
 5. 家族みんなでよく話をする
 6. 私は特に話ほしないが、なんとなく家族といっしょにすることが多い
 7. 父母の仲は、よその家にくらべて良い方だと思う
 8. きょうだいの仲は、よその家にくらべて

良い方だと思う

9. あてはまるものはない
- (6) あなたは、この家に生まれてイヤだと思ったことがありますか。それとも、そんなことはありませんか。
1. よくある
 2. ときどきある
 3. あまりない
 4. 全くない
- (7) あなたは父親と話し合う方ですか。
1. 非常によく話すほう
 2. 話すほう
 3. あまり話さない
 4. 全然話さない
- (8) あなたは母親と話し合う方ですか。
- (回答欄は(7)と同様)
- (9) あなたは家庭生活に満足していますか。
1. 満足
 2. やや満足
 3. 不満
 4. どちらとも言えない
- (10) あなたは、自分で処理できないような重大な問題が生じたとき、父や母に相談しますか。
1. 主に父に相談する
 2. 主に母に相談する
 3. 二人に相談する
 4. どちらにも相談しない

3. 結果

(A) 父親および母親に対する態度(表1、表2参照)

① 男子

◎〔父親に対して〕がより回答率が高い項目

- 体罰を受けた経験は母親からよりも、父親からの方が多い。
- 家庭よりも仕事を大切にしているのは、母親よりも父親である。
- 何となく憎しみを感じる時があるのは、母親よりも父親である。

◎〔母親に対して〕がより回答率が高い項目

- よく注意されるのは、父親からよりも母親からの方が多い。
- 仕事よりも家庭を大切にしているのは、

父親よりも母親である。

② 女子

◎〔父親に対して〕がより回答率が高い項目

○家庭よりも仕事を大切にしているのは、母親よりも父親である。

◎〔母親に対して〕がより回答率が高い項目

○尊敬しているのは、父親よりも母親に対してである。

○父親よりも母親に甘えたいと思っている。

○体罰を受けたことがあるのは、父親からよりも母親からの方が多い。

○よく注意されるのは、父親からよりも母親からである。

○うそをついたことがあるのは、父親よりも母親に対しての方が多い。

○将来の問題については、父親よりも母親に相談したい。

○父親よりも母親の意見に従いたい。

○何か困った時は、父親よりも母親に相談したい。

○仕事よりも家庭を大切にしているのは父親よりも母親である。

○自分に厳しいのは父親よりも母親である。

○自分の友人のようであるのは、父親よりも母親である。

○どちらかというと、父親よりも母親の方が好きである。

③ 父親に対して

◎ 男子が女子よりも回答率が高い項目

○父親にしかってほしいと思うのは、女子よりも男子の方が多い。

○父親から体罰を受けたことがあるのは女子よりも男子の方が多い。

○父親から期待されているのは、女子よりも男子に多い。

○父親が年をとったら一緒に暮らしたいと思っているのは女子よりも男子に多い。

◎ 女子が男子よりも回答率が高い項目

○父親に甘えたいというのは男子よりも女子に多い。

○結婚する時父親の同意をもとめるのは男子よりも女子に多い。

④ 母親に対して

◎ 男子が女子よりも回答率が高い項目

○母親と何かの問題で対立したことがあるのは女子よりも男子に多い。

◎ 女子が男子よりも回答率が高い項目

○母親に甘えたいのは男子よりも女子に多い。

○結婚する時、母親の同意をもとめるのは男子よりも女子に多い。

○将来の問題について母親に相談したいと思っているのは男子よりも女子に多い。

○何か困った時、母親に相談したいと思っているのは、男子よりも女子に多い。

○自分に対して母親が厳しいと思っているのは男子よりも女子に多い。

○母親がまるで自分の友人のようであると思っているのは、男子よりも女子に多い。

○どちらかというと、父親よりも母親の方が好きであるというのは男子よりも女子に多い。

⑤ きょうだいによる差（男子）

＜父親に対して＞

◎ きょうだい（上）が回答率の高い項目

○父親を信頼している。

○父親と何かの問題で対立したことがある。

○父親から体罰を受けたことがある。

○将来の問題について父親に相談したい。

○何か困った時は父親に相談したい。

表1 父親および母親に対する態度

男 子

	父 親 に 対 し て			母 親 に 対 し て		
	上 (43)	下 (38)	一人(13)	上 (43)	下 (38)	一人(13)
1. ～尊敬している	31 (72.1)	26 (68.4)	11 (84.6)	31 (72.1)	29 (76.3)	12 (92.3)
2. ～信頼している	39 (90.7)	28 (73.7)	9 (69.2)	36 (83.7)	29 (76.3)	12 (92.3)
3. ～甘えたい	2 (4.7)	2 (5.3)	1 (7.7)	6 (14.0)	8 (21.1)	1 (7.7)
4. ～しかってほしい	7 (16.3)	9 (23.7)	3 (23.1)	3 (7.0)	4 (10.5)	1 (7.7)
5. ～かくしごと～	37 (86.0)	34 (89.5)	11 (84.6)	40 (93.0)	34 (89.5)	12 (92.3)
6. ～対立した～	39 (90.7)	29 (76.3)	7 (53.8)	38 (88.4)	34 (89.5)	13(100.0)
7. ～態度に満足～	27 (62.8)	20 (52.6)	10 (76.9)	27 (62.8)	21 (55.3)	10 (76.9)
8. ～体罰を受けた～	34 (79.1)	24 (63.2)	8 (61.5)	29 (67.4)	18 (47.4)	6 (46.2)
9. ～注意される～	9 (20.9)	13 (34.2)	4 (30.8)	25 (58.1)	26 (68.4)	10 (76.9)
10. ～自信のある態度	26 (60.5)	22 (57.9)	7 (53.8)	24 (55.8)	25 (65.8)	9 (69.2)
11. ～うそ～	35 (81.4)	30 (78.9)	11 (84.6)	39 (90.7)	34 (89.5)	12 (92.3)
12. ～結婚同意～	24 (55.8)	28 (73.7)	9 (69.2)	27 (62.8)	27 (71.1)	10 (76.9)
13. ～期待されている	33 (76.7)	30 (78.9)	11 (84.6)	31 (72.1)	32 (84.2)	10 (76.9)
14. 将来の問題～	23 (53.5)	12 (31.6)	5 (38.7)	18 (41.9)	14 (36.8)	5 (38.7)
15. ～親の意見～	21 (48.8)	21 (55.3)	6 (46.2)	19 (44.2)	22 (57.9)	6 (46.2)
16. ～親に相談～	20 (46.5)	13 (34.2)	4 (30.8)	16 (37.2)	14 (36.8)	7 (53.8)
17. ～仕事を大切	13 (30.2)	14 (36.8)	6 (46.2)	2 (4.7)	3 (7.9)	2 (15.4)
18. ～家庭を大切	20 (46.5)	15 (39.5)	5 (38.7)	35 (81.4)	33 (86.8)	11 (84.6)
19. ～厳しい	11 (25.6)	10 (26.3)	1 (7.7)	7 (16.3)	9 (23.7)	5 (38.7)
20. ～友人のよう～	6 (14.0)	2 (5.3)	1 (7.7)	10 (23.3)	10 (26.3)	2 (15.4)
21. ～子どものしたいように～	29 (67.4)	25 (65.8)	9 (69.2)	30 (69.8)	24 (63.2)	11 (84.6)
22. ～考えに従わせる～	10 (23.3)	13 (34.2)	2 (15.4)	6 (14.0)	6 (15.8)	2 (15.4)
23. ～一緒に暮らしたい～	22 (51.2)	21 (55.3)	9 (69.2)	24 (55.8)	24 (63.2)	10 (76.9)
24. 父親(母親)が好き	11 (25.6)	11 (28.9)	5 (38.7)	21 (48.8)	20 (52.6)	5 (38.7)
25. ～憎しみを感じる	13 (30.2)	15 (39.5)	4 (30.8)	8 (18.6)	10 (26.3)	2 (15.4)
26. ～立派～	37 (86.0)	27 (71.1)	11 (84.6)	34 (79.1)	29 (76.3)	13(100.0)
27. ～愛着～	20 (46.5)	30 (78.9)	8 (61.5)	30 (69.8)	25 (65.8)	12 (92.3)

表2 父親および母親に対する態度

女 子

	父 親 対 して			母 親 対 して		
	上 (83)	下 (69)	一人(17)	上 (83)	下 (69)	一人(17)
1. ～尊敬している	56 (67.5)	44 (63.8)	8 (47.1)	63 (75.9)	50 (72.5)	11 (64.7)
2. ～信頼している	67 (80.7)	54 (78.3)	13 (76.5)	69 (83.1)	62 (89.9)	16 (94.1)
3. ～甘えたい	19 (22.9)	22 (31.9)	5 (29.4)	36 (43.4)	32 (46.4)	9 (52.9)
4. ～しかってほしい	8 (9.6)	7 (10.1)	1 (5.9)	11 (13.3)	10 (14.5)	1 (5.9)
5. ～かくしごと～	71 (85.5)	57 (82.6)	15 (88.2)	72 (86.7)	62 (89.9)	16 (94.1)
6. ～対立した～	64 (77.1)	52 (75.4)	12 (70.6)	67 (80.7)	52 (75.4)	14 (82.4)
7. ～態度に満足～	49 (59.0)	34 (49.3)	11 (64.7)	54 (65.1)	47 (68.1)	12 (70.6)
8. ～体罰を受けた～	43 (51.8)	31 (44.9)	7 (41.2)	47 (56.6)	38 (55.1)	9 (52.9)
9. ～注意される～	30 (36.1)	24 (34.8)	5 (29.4)	54 (65.1)	46 (66.7)	13 (76.5)
10. ～自信のある態度	53 (63.9)	43 (62.3)	10 (58.8)	53 (63.9)	49 (71.0)	12 (70.6)
11. ～うそ～	66 (79.5)	55 (79.7)	14 (82.4)	75 (90.4)	63 (91.3)	16 (94.1)
12. ～結婚同意～	72 (86.7)	61 (88.4)	16 (94.1)	75 (90.4)	64 (92.8)	16 (94.1)
13. ～期待されている	53 (63.9)	44 (63.8)	13 (76.5)	55 (66.3)	50 (72.5)	13 (76.5)
14. 将来の問題～	47 (56.6)	29 (42.0)	7 (41.2)	53 (63.9)	45 (65.2)	12 (70.6)
15. ～親の意見～	48 (57.8)	33 (47.8)	10 (58.8)	56 (67.5)	40 (58.0)	12 (70.6)
16. ～親に相談～	32 (38.6)	26 (37.7)	7 (41.2)	55 (66.3)	43 (62.3)	14 (82.4)
17. ～仕事を大切	25 (30.1)	24 (34.8)	0 (0.0)	9 (10.8)	4 (5.8)	1 (5.9)
18. ～家庭を大切	36 (43.4)	32 (46.4)	13 (76.5)	68 (81.9)	61 (88.4)	14 (82.4)
19. ～厳しい	23 (27.7)	22 (31.9)	6 (35.3)	31 (37.3)	28 (40.6)	12 (70.6)
20. ～友人のよう～	11 (13.3)	9 (13.0)	1 (5.9)	39 (47.0)	24 (34.8)	12 (70.6)
21. ～子どものしたいように～	53 (63.9)	37 (53.6)	12 (70.6)	52 (62.7)	48 (69.6)	9 (52.9)
22. ～考えに従わせる～	22 (26.5)	27 (39.1)	5 (29.4)	22 (26.5)	14 (20.3)	4 (23.5)
23. ～一緒に暮らしたい	36 (43.4)	25 (36.2)	8 (47.1)	56 (67.5)	39 (56.5)	8 (47.1)
24. ～父親(母親)が好き	14 (16.9)	12 (17.4)	3 (17.6)	50 (60.2)	49 (71.0)	13 (76.5)
25. ～憎しみを感じる	27 (32.5)	27 (39.1)	7 (41.2)	27 (32.5)	19 (27.5)	5 (29.4)
26. ～立派～	61 (73.5)	47 (68.1)	10 (58.8)	63 (75.9)	58 (84.1)	12 (70.6)
27. ～愛着～	44 (53.0)	38 (55.1)	14 (82.4)	65 (78.3)	60 (69.6)	14 (82.4)

- ◎ きょうだい（下）が回答率の高い項目
 - 父親からよく注意される。
 - 結婚する時父親の同意を求める。
 - 父親に愛着を感じる。

- ◎ きょうだい（一人）が回答率の高い項目
 - 父親を尊敬している。
 - 父親の自分に対する態度に満足している。
 - 父は、家庭よりも仕事を大切にしている。
 - 父が年をとったら、一緒に暮らしたい。
 - どちらかというと、母親よりも父親の方が好きである。

<母親に対して>

- ◎ きょうだい（上）が回答率の高い項目
 - 母親から体罰を受けたことがある。
- ◎ きょうだい（下）が回答率の高い項目
 - なるべく母親の意見には従いたい。
- ◎ きょうだい（一人）
 - 母親を尊敬している。
 - 母親を信頼している。
 - 母親と何かの問題で対立したことがある。
 - 母親の自分に対する態度に満足している。
 - 母親からよく注意される。
 - 何か困った時、母親に相談したい。
 - 母は私に対して厳しい。
 - 母は、子どものしたようにさせる。
 - 母が年をとったら一緒に暮らしたい。
 - 母は立派だと思う。
 - 母に愛着を感じる。

⑥ きょうだいによる差（女子）

<父親に対して>

- ◎ きょうだい（上）が回答率の高い項目
 - 父親から体罰を受けたことがある。
 - 将来の問題について父親に相談したい。
- ◎ きょうだい（下）が回答率の高い項目

○ 父は、自分の考えに従わせようとする。

- ◎ きょうだい（一人）が回答率の高い項目
 - 父親から期待されている。
 - なるべく父親の意見には従いたい。
 - 父は、仕事よりも家庭を大切にしている。
 - 父に愛着を感じる。

<母親に対して>

- ◎ きょうだい（上）が回答率の高い項目
 - 母が年をとったら一緒に暮らしたい。
- ◎ きょうだい（下）が回答率の高い項目
 - ナシ
- ◎ きょうだい（一人）が回答率の高い項目
 - 母親からよく注意される。
 - 何か困った時、母親に相談したい。
 - 私の母は、私に対して厳しい。
 - 母はまるで私の友人のようである。

(B) 父親・母親の態度に対する評価（表3、表4参照）

① 男子

- ◎ [父親に対して] がより回答率が高い項目
 - 父親の方が母親よりもわがままである。
 - 夜おそくならないと帰ってこないのは母親よりも父親の方が多い。
- ◎ [母親に対して] がより回答率が高い項目
 - 自分に対してあたたかいのは父親よりも母親であると思っているものが多い。
 - 自分の気持をわかろうとしているのは、父親よりも母親である。
 - 何かにつけて、私の行動に口をはさむのは、父親よりも母親である。
 - 私に期待をかけすぎているのは、父親よりも母親である。
 - きょうだいや他の人とくらべたがるのは、父親よりも母親である。

○おこっても、あまりこわくないのは父親よりも母親である。

② 女子

◎＜父親に対して＞がより回答率の高い項目

○父親の方が母親よりもわがままである。
○夜おそくならないと帰ってこないのは母親よりも父親の方が多い。

◎＜母親に対して＞がより回答率の高い項目

○私に対してあたたかいのは、父親よりも母親である。
○私の気持ちをわかろうとしているのは父親よりも母親である。
○私にきびしいのは、父親よりも母親である。
○私の行動に口をはさむのは、父親よりも母親である。
○私に期待をかけすぎているのは、父親よりも母親である。
○私をきょうだいや他の人とくらべたがるのは父親よりも母親である。
○友だちが多いのは、父親よりも母親である。
○いっしょに外出したり遊んでくれることがあるのは、父親よりも母親である。

③ 父親に対して

◎ 男子が女子よりも回答率が高い項目
○男子の方が父親をがんばりやであると思っている。

◎ 女子が男子よりも回答率が高い項目
○父親がわがままでであると思っているのは、男子よりも女子に多い。
○父親が、自分といっしょに外出したり、遊んでくれることがあると思っているのは、男子よりも女子に多い。

④ 母親に対して

◎ 男子が女子よりも回答率の高い項目
○母はおこってもあまりこわくないと思

っているのは、女子よりも男子に多い。

◎ 女子が男子よりも回答率が高い項目
○母親が自分にきびしいと思っているのは、男子よりも女子に多い。

○母親が自分といっしょに外出したり遊んでくれることがあるのは、男子よりも女子に多い。

⑤ きょうだいによる差（男子）

＜父親に対して＞

◎ きょうだい（上）が回答率の高い項目
○父には友達が多い。
○父は、いつも夜おそくならないと帰ってこない。

◎ きょうだい（下）が回答率の高い項目
○父は、わがままである。

◎ きょうだい（一人）が回答率の高い項目
○父は、私に対してあたたかい。

＜母親に対して＞

◎ きょうだい（上）が回答率の高い項目
○ナシ

◎ きょうだい（下）が回答率の高い項目
○母は、私をきょうだいや他の人とくらべたがる。

○母はわがままである。

◎ きょうだい（一人）が回答率の高い項目

○母は何かにつけて、私の行動に口をはさむ。

○母はたよりがいがいる。

⑥ きょうだいによる差（女子）

＜父親に対して＞

◎ きょうだい（上）が回答率の高い項目
○父には、友だちが多い。

◎ きょうだい（下）が回答率の高い項目
○父は、わがままである。

◎ きょうだい（一人）が回答率の高い項目

○父は、私の気持ちをわかろうとしている。

表3 父親・母親の能度に対する評価(男子)

	父親に対して			母親に対して		
	上 (43)	下 (38)	一人(13)	上 (43)	下 (38)	一人(13)
1. ～あたたかい	35 (81.4)	31 (81.6)	12 (92.3)	42 (97.7)	34 (89.5)	13 (100.0)
2. ～わかろうとしている	28 (65.1)	28 (73.7)	10 (76.9)	37 (86.0)	30 (78.9)	11 (84.6)
3. ～きびしい	16 (37.2)	12 (31.6)	2 (15.4)	16 (37.2)	10 (26.3)	5 (38.7)
4. ～口をはさむ	7 (16.3)	6 (15.8)	4 (30.8)	16 (37.2)	19 (50.0)	8 (61.5)
5. ～押しつけようとする	9 (20.9)	10 (26.3)	3 (23.1)	6 (14.6)	9 (23.7)	1 (7.7)
6. ～期待をかけ～	11 (25.6)	5 (13.2)	2 (15.4)	17 (39.5)	14 (36.8)	4 (30.8)
7. ～くらべたがる	2 (4.7)	3 (7.9)	0 (0.0)	8 (18.6)	15 (39.5)	4 (30.8)
8. ～こわくない	10 (23.3)	18 (47.4)	7 (53.8)	27 (62.8)	26 (68.4)	8 (61.5)
9. ～たよりがいがある	33 (76.7)	22 (57.9)	9 (69.2)	20 (46.5)	19 (50.0)	9 (69.2)
10. ～わがまま	8 (18.6)	16 (42.1)	3 (23.1)	2 (4.7)	10 (26.3)	1 (7.7)
11. ～がんばりや～	41 (95.3)	32 (84.2)	13 (100.0)	39 (90.7)	35 (92.1)	12 (92.3)
12. ～友だちが多い	34 (79.1)	21 (55.3)	7 (53.8)	36 (83.7)	30 (78.9)	9 (69.2)
13. ～遊んでくれる～	15 (34.9)	11 (28.9)	4 (30.8)	10 (23.3)	10 (26.3)	3 (23.1)
14. ～帰ってこない	11 (25.6)	6 (15.8)	2 (15.4)	0 (0.0)	2 (5.3)	0 (0.0)
15. ～愛している	38 (88.4)	28 (73.7)	11 (84.6)	37 (86.0)	26 (68.4)	12 (92.3)

表4 父親・母親の態度に対する評価(女子)

	父親に対して			母親に対して		
	上 (83)	下 (69)	一人(17)	上 (83)	下 (69)	一人(17)
1. ～あたたかい	65 (78.3)	56 (81.2)	14 (82.4)	73 (88.0)	66 (95.7)	16 (94.1)
2. ～わかろうとしている	48 (57.8)	36 (52.2)	13 (76.5)	62 (74.7)	52 (75.4)	15 (88.2)
3. ～きびしい	30 (36.1)	26 (37.7)	7 (41.2)	39 (47.0)	33 (47.8)	11 (64.7)
4. ～口をはさむ	26 (31.3)	26 (37.7)	4 (23.5)	32 (38.6)	33 (47.8)	8 (47.1)
5. ～押しつけようとする	20 (24.1)	22 (31.9)	4 (23.5)	21 (25.3)	13 (18.8)	3 (17.6)
6. ～期待をかけ～	8 (9.6)	9 (13.0)	6 (35.3)	12 (14.5)	15 (21.7)	8 (47.1)
7. ～くらべたがる	16 (19.3)	12 (17.4)	1 (5.9)	22 (26.5)	26 (37.7)	6 (35.3)
8. ～こわくない	25 (30.1)	16 (23.2)	7 (41.2)	33 (39.8)	22 (31.9)	6 (35.3)
9. ～たよりがいがある	58 (69.9)	43 (62.3)	10 (58.8)	54 (65.1)	45 (65.2)	10 (58.8)
10. ～わがまま～	34 (41.0)	36 (52.2)	7 (41.2)	16 (19.3)	18 (26.1)	5 (29.4)
11. ～がんばりや～	68 (81.9)	57 (82.6)	13 (76.5)	77 (92.8)	57 (82.6)	15 (88.2)
12. ～友だちが多い	57 (68.7)	40 (58.0)	9 (52.9)	66 (79.5)	60 (87.0)	14 (82.4)
13. ～遊んでくれる～	43 (51.8)	31 (44.9)	6 (35.3)	55 (66.3)	50 (72.5)	13 (76.5)
14. ～帰ってこない	20 (24.1)	15 (21.7)	3 (17.6)	2 (2.4)	3 (4.3)	0 (0.0)
15. ～愛している	73 (88.0)	61 (88.4)	14 (82.4)	71 (85.5)	57 (82.6)	13 (76.5)

○父は、おこつてもあまりこわくない。

<母親に対して>

◎ きょうだい（上）が回答率の高い項目

○ナシ

◎ きょうだい（下）が回答率の高い項目

○ナシ

◎ きょうだい（一人）が回答率の高い項目

○母は私の気持ちをわかつてしている。

○母は私にきびしい。

○母は私に期待をかけすぎている。

(C) 父親・母親に対する満足度（表5、表6参照）

① 父親に対する満足度の性差

父親に対する満足度は、男子と女子とにおいて有意な差はみられないが、全般的にみると、男子の方がやや満足度が高い傾向

がある。

② 母親に対する満足度の性差

母親に対する満足度は、男女において差がみられない。

③ 父親への満足度と母親への満足度の差

男女ともに、父親に対するよりも、母親に対する満足度の方が高いことがみとめられる。ことに女子においては、この傾向が著しくみられる。

④ 父親に対する満足度のきょうだい差

男女ともにきょうだい（下）が、他のグループに比べて、満足度がやや低い傾向がみられる。

⑤ 母親に対する満足度のきょうだい差

男子ではきょうだい（下）が他のグループに比べて、やや満足度が低い傾向がみられるが、女子では差がみられない。

表5 父親に対する満足度

	男 子			女 子		
	上 (43)	下 (38)	一人 (13)	上 (83)	下 (69)	一人 (17)
1. 満足している	17 (39.5)	11 (28.9)	5 (38.7)	25 (30.1)	20 (29.0)	5 (29.4)
2. やや満足している	10 (23.3)	10 (26.3)	4 (30.8)	31 (37.3)	14 (20.3)	6 (35.3)
3. どちらともいえない	6 (14.0)	3 (7.9)	2 (15.4)	7 (8.4)	14 (20.3)	2 (11.8)
4. やや不満である	8 (18.6)	9 (23.7)	1 (7.7)	9 (10.8)	12 (17.4)	2 (11.8)
5. 不満である	2 (4.7)	5 (13.2)	1 (7.7)	11 (13.3)	9 (13.0)	2 (11.8)
平 均 値	2.26	2.66	2.15	2.39	2.65	2.41

表6 母親に対する満足度

	男 子			女 子		
	上 (43)	下 (38)	一人 (13)	上 (83)	下 (69)	一人 (17)
1. 満足している	20 (46.5)	13 (34.2)	5 (38.7)	34 (41.0)	32 (46.4)	6 (35.3)
2. やや満足している	13 (30.2)	13 (34.2)	4 (30.8)	30 (36.1)	19 (27.5)	9 (52.9)
3. どちらともいえない	5 (11.6)	5 (13.2)	3 (23.1)	4 (4.8)	10 (14.5)	1 (5.9)
4. やや不満である	3 (7.0)	4 (10.5)	1 (7.7)	12 (14.5)	7 (10.1)	1 (5.9)
5. 不満である	2 (4.7)	3 (7.9)	0 (0.0)	3 (3.6)	1 (1.4)	0 (0.0)
平 均 値	1.93	2.24	2.00	2.04	1.93	1.82

(D) 家族とのつきあいかた（表7参照）

① 性差

「父に口ごたえする」、「きょうだいの仲がよい」の2項目には、性差がみとめられ、男子よりも女子の方が回答率が高い傾向がみとめられる。

② きょうだいによる差（男子）

◎ きょうだい（上）が回答率が高い項目

○ ナシ

◎ きょうだい（下）が回答率が高い項目

○ 仕事や家事を手伝う。

○ 母に口ごたえする。

○ きょうだいの仲がよい。

◎ きょうだい（一人）が回答率が高い項目

○ 家族とよく話をする。

○ 父母の仲がよい。

表7 家族とのつきあいかた

	男 子			女 子		
	上 (83)	下 (38)	一人 (13)	上 (83)	下 (69)	一人 (17)
1. 仕事や家事を手伝う	13 (15.7)	16 (42.1)	1 (7.7)	26 (31.3)	25 (36.2)	1 (5.9)
2. 部屋に一人でいることが多い	12 (14.5)	10 (26.3)	3 (23.1)	17 (20.5)	20 (29.9)	3 (17.6)
3. 父に口ごたえする	6 (7.2)	7 (18.4)	3 (23.1)	30 (36.1)	17 (24.6)	6 (35.3)
4. 母に口ごたえする	14 (16.9)	17 (44.7)	3 (23.1)	26 (31.3)	26 (37.7)	7 (41.2)
5. 家族とよく話をする	18 (21.7)	10 (26.3)	7 (53.8)	39 (47.0)	31 (44.9)	8 (47.1)
6. 家族といっしょにすることが多い	11 (13.3)	11 (28.9)	3 (23.1)	23 (27.7)	15 (21.7)	4 (23.5)
7. 父母の仲がよい	25 (30.1)	9 (23.7)	9 (69.2)	43 (51.8)	29 (42.0)	9 (52.9)
8. きょうだいの仲がよい	19 (22.9)	12 (31.6)	0 (0.0)	29 (34.9)	36 (52.2)	0 (0.0)
9. あてはまるものがない	3 (3.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.2)	0 (0.0)	1 (5.9)

(E) 自分の家に生まれたことについて（表8参照）

男女による差はほとんどみとめられないが、きょうだい差が多少みられる。

男子では、「よくある」「ときどきある」を加えると、きょうだい（上）では32.6%、（下）では50.0%、（一人）では53.8%であ

り、（上）で最も回答率が低い。女子では、同様の方法によると、（上）では37.4%、（下）では44.9%、（一人）では35.3%で、とくに（下）の回答率が女子の他のグループに比べて著しく高い。以上のことから、男女ともに回答率が比較的高いのは、きょうだい（下）のグループである。

表8. 自分の家に生まれてイヤだと思ったことがあるか

	男 子			女 子		
	上 (43)	下 (38)	一人 (13)	上 (83)	下 (69)	一人 (17)
1. よくある	2 (4.7)	6 (15.8)	0 (0.0)	11 (13.3)	9 (13.0)	1 (5.9)
2. ときどきある	12 (27.9)	13 (34.2)	7 (53.8)	20 (24.1)	22 (31.9)	5 (29.4)
3. あまりない	17 (39.5)	13 (34.2)	3 (23.1)	37 (44.6)	24 (34.8)	10 (58.8)
4. 全くない	12 (27.9)	6 (15.8)	3 (23.1)	15 (18.1)	14 (20.3)	1 (5.9)

(F) 父親と話し合う程度（表9参照）

男女による差はみられないが、きょうだい差がみとめられる。

男子では、「非常によく話すほう」「話すほう」を加えるときょうだい（上）では51.2%、（下）では34.2%、（一人）では53.8%であり、明らかにきょうだい（下）のグループの

ものが父親と話すことが少ないことがわかる。また、女子においては、同様な方法によると、きょうだい（上）では46.9%、（下）では40.5%、（一人）では52.9%となり、女子においても、きょうだい（下）が他のグループに比べて父親と話すものが多少、少ない傾向にある。

表9 父親と話し合う程度

	男 子			女 子		
	上 (43)	下 (38)	一人 (13)	上 (83)	下 (69)	一人 (17)
1. 非常によく話すほう	2 (4.7)	1 (2.6)	0 (0.0)	8 (9.6)	5 (7.2)	0 (0.0)
2. 話すほう	20 (46.5)	12 (31.6)	7 (53.8)	31 (37.3)	23 (33.3)	9 (52.9)
3. あまり話さない	15 (34.9)	16 (42.1)	6 (46.2)	38 (45.8)	32 (46.4)	7 (41.2)
4. 全然話さない	6 (14.0)	9 (23.7)	0 (0.0)	6 (7.2)	9 (13.0)	1 (5.9)

(G) 母親と話し合う程度（表10参照）

母親と「非常によく話すほう」の率をみると、男子よりも女子の方が率が高く、一般には女子の方がよく母親と話していることが理解できる。

きょうだい差についてみると、「非常によく話すほう」では、男女ともにきょうだい（一人）の率が高い。「非常によく話すほう」と「話すほう」を加えて集計すると、男子で

は、きょうだい（上）81.4%、（下）76.4%（一人）92.3%であり、女子では、きょうだい（上）86.8%、（下）86.9%、（一人）88.2%である。この結果によると、男子では明らかに、（一人）が母親と話し合う率が高く、それに比べて（下）では率がややさがっていることが理解できる。また女子においては、（上）、（中）、（一人）の3グループにおいてほとんど差がみとめられない。

表10 母親と話し合う程度

	男 子			女 子		
	上 (43)	下 (38)	一人 (13)	上 (83)	下 (69)	一人 (17)
1. 非常によく話すほう	11 (25.6)	8 (21.1)	4 (30.8)	36 (43.4)	25 (36.2)	9 (52.9)
2. 話すほう	24 (55.8)	21 (55.3)	8 (61.5)	36 (43.4)	35 (50.7)	6 (35.3)
3. あまり話さない	6 (14.0)	9 (23.7)	1 (7.7)	9 (10.8)	9 (13.0)	2 (11.8)
4. 全然話さない	2 (4.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.4)	0 (0.0)	0 (0.0)

(H) 家庭生活の満足度（表11参照）

性差はみとめられないが、きょうだい差は男女ともにみとめられる。「満足」「やや満足」を合計して集計すると、男子ではきょうだい（上）が81.4%、（下）が71.1%、（一人）が92.4%である。この結果からみると、男子では、きょうだい（一人）が満足度が最も高

く、（下）が相対的に他のグループに比べて低い傾向がみられる。また女子では、きょうだい（上）が81.9%、（下）が72.5%、（一人）が82.3%である。女子では、きょうだい（下）が他のグループに比べて相対的に満足度が低い傾向がみられる。

表11 家庭生活の満足度

	男 子			女 子		
	上 (43)	下 (38)	一人 (13)	上 (83)	下 (69)	一人 (17)
1. 満 足	19 (44.2)	12 (31.6)	6 (46.2)	29 (34.9)	24 (34.8)	5 (29.4)
2. やや満足	16 (37.2)	15 (39.5)	6 (46.2)	39 (47.0)	26 (37.7)	9 (52.9)
3. 不 満	4 (9.3)	9 (23.7)	1 (7.7)	10 (12.0)	13 (18.8)	3 (17.6)
4. どちらともいえない	4 (9.3)	2 (5.3)	0 (0.0)	5 (6.0)	6 (8.7)	0 (0.0)

(I) 両親への相談 (表12参照)

両親への相談に関しては、明らかな性差がみとめられる。男子では女子に比べて「主に父に相談する」が多く、また女子では男子に比べて「主に母に相談する」が多い。きょうだい差については、男子では、きょうだい(上)が、「二人に相談する」がもっとも多く、(一

人)では、「主に母に相談する」が多く、「二人に相談する」が続いている。また(下)では、相談相手が特定せず分かれている。女子では、きょうだいによる差はほとんどみとめられず、どのグループも「主に母に相談する」がもっとも多い。

表12 両親への相談

	男 子			女 子		
	上 (43)	下 (38)	一人 (13)	上 (83)	下 (69)	一人 (17)
1. 主に父に相談する	6 (14.0)	9 (23.7)	0 (0.0)	4 (4.8)	2 (2.9)	0 (0.0)
2. 主に母に相談する	6 (14.0)	11 (28.9)	6 (46.2)	38 (45.8)	31 (44.9)	10 (58.8)
3. 二人に相談する	20 (46.5)	8 (21.1)	5 (38.7)	23 (27.7)	16 (23.2)	5 (29.4)
4. どちらにも相談しない	11 (25.6)	10 (26.3)	2 (15.4)	18 (21.7)	20 (29.0)	2 (11.8)

(J) 性格との関連 (表13参照)

性差に関しては、Eスケール(外向性、内向性)において、男子に比べて女子の方の平均スコアがやや高くなっている。有意であるとは言えないが、女子の方がやや外向的傾向がみられる。Nスケール(神経症的傾向)については性差はまったくみられない。

きょうだい差に関しては、男子では、きょうだい(下)のグループにおいて、Eスケールの得点が高めのグループに比べてやや低く、またNスケールの得点が高くなっている。また、きょうだい(一人)のグループでは、(下)のグループと逆の結果となっている。これは男子に関しては、(一人)がやや外向的で、神経症的傾向が少なく、また(下)が、それに比べるとやや内向的に傾き、神経症的

傾向の度合いが(一人)のグループに比べてやや高いことを示している。

また女子では、きょうだい(一人)のグループにおいて、明らかな特徴がみられEスケールのスコアが高く、Nスケールのスコアが低くなっている。これは、男子同様、女子においても、きょうだい(一人)は、外向的で神経症的傾向が少ないことを示している。また女子においても男子同様に、Nスケールにおいて、きょうだい(下)のグループが高い傾向がみとめられる。

表13 性格との関連

		男 子			女 子		
		上 (43)	下 (38)	一人 (13)	上 (83)	下 (69)	一人 (17)
E スケール	\bar{x}	30.70	27.16	31.62	31.05	31.83	33.12
	S D	10.52	10.64	11.47	10.49	9.24	10.45
N スケール	\bar{x}	21.05	24.37	18.38	22.58	24.16	17.94
	S D	12.08	11.23	9.68	9.15	10.61	8.29

以上、性差ときょうだい差を中心として、大学生の両親に対する態度や家庭の満足度、さらに話し合いの程度などについて述べてきたが、本調査では、データの数が不十分であるので、

本稿では、調査結果の記述のみにとどめた。今後は、多くのデータを集め、更に多方面から検討する必要があると思われる。

単身赴任家庭を対象とした家族関係 評価尺度の作成

鈴木 乙 史

1. 研究目的

わが国独特の勤務形態である単身赴任は、労務行政研究所の調査（1984）によると、家族持ちの転勤者のうちの平均18.5%にのぼっている（全国の企業300社が対象）。年齢別にみると、30歳代は少ないが、40歳代から急激に増加し、45～49歳では、33.3%，50歳以上では43.8%も単身赴任が選ばれている。

単身赴任が選ばれる理由は、いくつかの調査（労務行政研究所，1984，依田明他，1984 etc）で一致しており，第1には，子どもの勉強，進学，受験などの子どもの勉学に関するもの，第2には，家を新築した，購入したなどの家に関するもの，第3には，祖父母が老齢であるため，病気であるためなどの，老親に関するものである。

単身赴任は，このような理由によって，選択されるのであるが，単身赴任する夫にとっても，家庭に残る妻や子どもにとっても，共に，大きなストレスを経験することになる。夫や残された妻や子にかかるストレスは，主として，経済上の問題，健康上の問題，家族関係に関する問題に大別しうる。

家族関係に焦点をあてると，単身赴任は，家族にとって重要なメンバーである夫（父親）を欠くことになるため，母子家庭（父親不在家庭）と同様な形態が現われる。夫婦関係，父子関係が長期にわたって欠けることになるため，さまざまな問題が現われる。母親にとって，子どもにとって，また夫にとっても対象喪失を経験することになる。また，家族メンバーの役割も変化せざるを得ない。このように，単身赴任は，家族にとっては危機的状況である。

しかしながら，夫の単身赴任が，夫婦関係，親子関係の「きづな」を弱め，家族崩壊に導びくものであるとは単純には言えない。（鈴木乙史 1986，依田明他 1984）むしろ，単身赴任という家族の危機をきっかけとして，夫婦，親子が結束し，危機を克服し，より強い夫婦・親子のきづなを獲得することもありうる（鈴木乙史 1987）。また逆に，単身赴任をきっかけとして，夫婦・親子関係に決定的なひびが入り，不適応傾向が強まったり，ついには，離婚や非行や無理心中といった深刻な問題が発現するようになることもある。

単身赴任という家族の危機をきっかけとし，夫婦関係・親子関係がどのように変化するかは，単身赴任以前の夫婦関係・親子関係がどのような特徴を持っていたかによって，大きく影響されるであろう。しかし，それだけではなく，単身赴任中の夫婦相互の配慮のあり方，コミュニケーションの質と量など，すなわち，単身赴任を夫婦がどうとらえ，どのようなことを考え，どのような働きかけを相互にするようになるかが，大きな要因であると考えられる。（鈴木乙史 1987）

本研究では，単身赴任中の家族を対象として，夫婦・親子のきづなが強まり，危機を克服するような状態に家族関係があるのか，または，夫婦・親子のきづなが弱まり，家族崩壊的な状態であるのかを評価しうる。単身赴任家族の家族評価尺度を作成することを目的としている。

2. 方法

単身赴任家族の妻を対象とした第1回調査（予備調査）用の質問紙を作成し，調査を実施

した。結果の主要な部分は、依田明、鈴木乙史、清水弘司（1984）で報告している。この質問紙には、単身赴任についての妻の考え、思いを聞く質問（自由記述）が含まれている。回答の内容分析をした結果、単身赴任家庭における家族関係の特徴を示す項目を数多くとり出すことができた。

第2次調査では、第1次調査と同じ対象に約1年後の時点で、再調査をした。本質問紙では、第1次調査の分析から、単身赴任家庭の家族関係を記述した項目（23項目）が含まれており、5段階で評定が求められた。

評定された結果を、因子分析（主因子法、バリマックス回転）にかけることによって、単身赴任家庭の家族関係を評価する因子を見出し、尺度を作成する。

(1) 調査対象

第1次調査……ある大手メーカーに勤める単身赴任者の家族、123家族が対象とされた。調査票を送付できたのは、うち118家族。回収されたのは77家族であった。回収率は、65.25%であった。

第2次調査……同じ対象である118家族に調査票を送付した。回収されたのは50家族で、ほとんどが、第1次調査の回答者であった。

このように、第1次調査では、77家族の妻、第2次調査では50家族の妻が対象とされた。

(2) 調査日時

第1次調査……昭和60年1月から3月まで

第2次調査……昭和61年1月から3月まで

3. 結果と考察

(1) 母親の自由記述の分析

「ご主人が単身赴任をするということについて、今、お感じになっていることを何でもかまいませんからご自由にお書き下さい」というインストラクションで、自由記述をしてもらった。

77名中9名のみが無答で、68名（88.31%）

の回答を得た。自由記述の回答率としては、非常に高い値であり、内容も何かを伝えたいという気持ちが伝わってくるものであった。

内容分析は、全体から6つの大カテゴリーに分類し、後に小カテゴリーに分けることによっておこなった。表1に示されたように、大カテゴリーは、①健康に関するコメント、②経済に関するコメント、③妻・夫・夫婦関係に関するコメント、④子、親子関係に関するコメント、⑤家族関係全体に関するコメント、⑥その他である。それぞれの大カテゴリーに分類されたコメントは、下位の小カテゴリーにさらに分類された。

表1 単身赴任に関する意見・感想の分析
（依田他 1984, P162）

大カテゴリー	小カテゴリー	数	評価
1) 健康に関するコメント 23	①夫の健康に関するもの ②妻自身の健康に関するもの ③家族全体の健康に関するもの	21 1 1	すべてマイナス
2) 経済に関するコメント 15	①生活費に関するもの ②交通費に関するもの ③税金面に関するもの ④別居手当に関するもの	7 2 1 5	すべてマイナス
3) 夫、妻、夫婦関係に関するコメント 52	①自由さ、気楽さに関するもの ②夫の大変さに関するもの ③夫婦の思いやりに関するもの ④夫婦の会話の少なさに関するもの ⑤妻の大変さに関するもの ⑥妻の自覚、自信に関するもの ⑦長期の単身赴任に関するもの ⑧夫の配慮に関するもの ⑨その他	9 8 7 6 6 4 3 2 7	プラス24 マイナス26
4) 子、親子関係に関するコメント 27	①父親の重要性・母親の大変さに関するもの ②子どもの不安定さに関するもの ③父子関係に関するもの ④母子関係に関するもの ⑤その他	11 5 3 3 5	プラス3 マイナス21
5) 家族関係全体に関するコメント 6	* 家族が一緒に住むということの重要さの認識など	6	マイナス4
6) その他 9	* 転校についての要望、単身赴任の必要性に対する疑問など	9	

表中の数はコメント数

(2) 評価項目の選択と評定

③, ④, ⑤の大カテゴリーに分類された合計88個のコメントから, 小カテゴリーと小カテゴリー毎のコメント数を配慮して, 22項目の評定項目が選ばれた。また, 健康のカテゴリーから1項目が導入項目として加えられ, さらに経済のカテゴリーから1項目が例示のための項目とされた。このようにして, 23項目(実質的には22項目)の評定尺度が仮に選択された。

第2次調査において, この評定尺度は, 「次に, 単身赴任についてのいろいろな思いや考えがありますが, あなたにとってはどうでしょうか。あてはまると思うところに, 例のように○印をつけて下さい」というインストラクションで, 被調査者に5段階で評定してもらった。評定は全くあてはまらない(1)から, 非常によくあてはまる(5)までで, あてはまる程, 5に近づく。結果は, 表2に示した。

(3) 因子分析と家族関係評定尺度の選定

表2で示した結果を用いて因子分析を行った。表3には, 対象者50名の相関表を示した。因子分析は, 主因子法により因子寄与を求めた。表4に示したように6因子までで累積の因子寄与率が100%を超えるため, 因子数は6となった。次に, バリマックス回転により因子構造を決定するという方法をとった。その結果, 表5に示したように, 各因子毎の因子負荷, 因子寄与が得られた。

第1因子は, 次の5項目から構成されている。番号は, 項目番号を示し, () 内の数値は, 項目の負荷量を示している。

6 話したいことを話したい時に話せないのがつらい (0.696)

8 さびしさや不安感をよく感じる (0.692)

9 さまざまなことを自分で処理しなくてはならないのでとてもつらい

(0.685)

表2 項目内容と平均および標準偏差

	M	SD
(1) 夫の健康が心配である。	4.59	0.67
(2) 生活のリズムがむしろとりやすくなった。	3.67	0.77
(3) 自由に時間を使え, 楽しめるようになった。	3.08	1.04
(4) 夫に不自由な思いをさせてすまないと思う。	4.02	0.82
(5) 夫が一番大変なのだと思う。	4.36	0.79
(6) 話したいことを話したい時に話せないのがつらい。	4.08	0.82
(7) 夫婦の会話が少なくなって, 考え方にズレが生まれるようになった。	2.26	1.13
(8) さびしさや不安感をよく感じる。	3.46	1.20
(9) さまざまなことを自分で処理しなくてはならないのでとてもつらい。	3.30	1.17
(10) 自分自身の人生を改めて考え, 自分自身の目標をもとうと思うようになった。	3.42	0.87
(11) 夫が今まで以上に, 私や子どもに優しく気を使ってくれるようになった。	3.60	1.08
(12) 夫がいれば子どもの生活や態度にもっとけじめがつくと思う。	3.44	1.04
(13) 子どもが精神的に不安定になった。	2.54	1.06
(14) 子どもの学力が低下した。	2.30	1.14
(15) 子どもが父親に感謝する気持ちが強まった。	3.58	0.78
(16) ますます父と子の距離が離れた。	2.18	1.07
(17) 子どもが私を甘くみて勝手にふるまうようになった。	2.08	0.91
(18) 子どもが私に協力してくれるようになった。	3.62	0.82
(19) なるべく子どもに, 夫の仕事や生活ぶりを話すようにしている。	3.90	0.73
(20) 赴任先での夫の生活が何かと気になる。	3.72	0.87
(21) 夫婦生活にヒビが入るのではないかと不安である。	2.02	1.13
(22) やはり家族は一緒の方がよいとしみじみわかった。	4.32	0.90
(23) 夫は家庭よりも会社を優先する人間だと思う。	3.24	1.23

表3 相 関 表

	1	2	3	4	5	6	7	8
1	0.336							
2	-0.093	0.489						
3	-0.200	0.489	0.489					
4	0.121	-0.182	-0.287	0.516				
5	0.214	0.070	-0.108	0.516	0.516			
6	0.061	0.075	0.157	0.028	-0.106	0.620		
7	-0.033	0.149	0.205	-0.049	-0.105	0.107	0.474	
8	0.336	-0.113	-0.142	0.052	0.141	0.408	0.015	0.598
9	-0.010	0.025	-0.119	0.015	-0.138	0.620	0.123	0.598
10	-0.156	0.124	0.118	-0.265	-0.131	0.009	0.194	-0.108
11	0.245	0.126	0.172	-0.037	0.005	0.376	-0.194	0.312
12	-0.064	0.112	-0.051	-0.010	0.026	0.193	-0.029	0.397
13	-0.084	0.004	-0.130	0.034	-0.278	0.340	0.150	0.228
14	-0.178	0.220	0.042	-0.092	-0.283	0.403	0.130	0.235
15	0.213	-0.240	-0.058	-0.050	-0.014	-0.041	-0.104	-0.007
16	-0.081	0.343	0.239	-0.096	-0.076	0.188	0.474	0.091
17	-0.290	0.154	0.078	0.025	-0.260	0.205	0.193	0.258
18	0.232	-0.046	-0.011	0.071	0.026	0.075	-0.088	-0.086
19	0.110	-0.025	0.011	0.105	-0.111	0.047	-0.041	0.121
20	-0.071	-0.233	-0.042	0.318	-0.085	0.255	-0.312	0.332
21	-0.028	0.085	0.031	-0.023	0.006	0.191	0.305	0.266
22	0.096	-0.248	-0.283	0.182	-0.077	0.424	-0.219	0.361
23	0.030	0.002	0.079	-0.025	-0.171	0.379	0.244	0.183
	9	10	11	12	13	14	15	16
9	0.620							
10	0.151	0.265						
11	0.397	0.264	0.397					
12	0.236	-0.005	0.175	0.498				
13	0.384	0.100	0.171	0.454	0.697			
14	0.459	0.022	0.247	0.498	0.697	0.697		
15	-0.037	0.054	0.325	-0.315	-0.064	-0.209	0.558	
16	0.132	0.133	-0.076	0.323	0.213	0.364	-0.558	0.558
17	0.352	-0.092	0.053	0.404	0.492	0.500	-0.291	0.272
18	0.077	0.139	0.145	-0.365	-0.109	-0.029	0.314	-0.127
19	0.200	0.192	0.051	0.032	0.147	-0.032	0.103	0.023
20	0.239	0.102	0.264	-0.062	0.206	0.020	0.210	-0.246
21	0.248	-0.078	-0.003	0.070	0.248	0.154	-0.186	0.341
22	0.457	-0.119	0.357	0.402	0.445	0.293	0.077	-0.183
23	0.312	-0.206	-0.094	-0.020	0.069	0.078	-0.209	0.150
	17	18	19	20	21	22	23	
17	0.500							
18	-0.279	0.505						
19	-0.018	0.505	0.505					
20	0.078	0.130	0.208	0.332				
21	0.268	-0.091	0.029	0.072	0.341			
22	0.260	0.110	0.140	0.240	0.007	0.457		
23	0.197	0.130	0.117	-0.143	0.238	0.274	0.379	

表4 累積因子寄与率 (ACC.%)

FACTORS	CONTRIBUTIONS	%	ACC. %
1	4.006	35.299	35.299
2	2.660	23.441	58.740
3	1.589	14.006	72.746
4	1.288	11.351	84.096
5	1.032	9.096	93.192
6	0.812	7.155	100.347

Number of FACTORS = 6

TRACE = 11.3477

表5 因子負荷と因子寄与

Number of FACTORS = 6

《《FACTOR LOADINGS (VARIMAX ROTATION)》》

	FACTOR					
	1	2	3	4	5	6
1	0.301	0.026	0.078	0.075	0.317	0.286
2	-0.023	-0.144	-0.661	-0.062	-0.116	0.050
3	0.008	-0.111	-0.623	-0.021	0.080	-0.195
4	0.011	0.007	0.337	0.155	-0.060	0.602
5	0.004	0.071	-0.030	-0.105	0.211	0.722
6	0.696	-0.222	-0.073	0.078	-0.168	-0.094
7	-0.056	-0.573	-0.228	0.037	-0.049	-0.103
8	0.692	-0.115	0.121	-0.064	-0.168	0.233
9	0.685	-0.196	0.037	0.178	-0.304	-0.084
10	-0.022	0.139	-0.358	0.299	-0.084	-0.172
11	0.583	0.342	-0.258	0.126	-0.075	-0.003
12	0.229	-0.007	-0.061	-0.224	-0.631	0.168
13	0.252	-0.056	0.106	0.173	-0.742	-0.142
14	0.293	-0.106	-0.154	0.020	-0.714	-0.167
15	0.206	0.477	0.106	0.243	0.365	-0.180
16	-0.050	-0.562	-0.412	-0.023	-0.352	0.094
17	0.165	-0.257	0.027	-0.126	-0.604	-0.131
18	0.116	0.037	0.003	0.667	0.294	-0.004
19	0.082	-0.056	0.030	0.678	-0.042	0.050
20	0.297	0.291	0.194	0.276	-0.124	0.042
21	0.178	-0.443	-0.025	-0.005	-0.154	0.041
22	0.530	0.101	0.380	0.097	-0.313	-0.005
23	0.279	-0.558	0.159	0.046	0.060	-0.161

<FACTOR CONTRIBUTIONS>

FACTOR # 1 = 2.640

FACTOR # 2 = 1.835

FACTOR # 3 = 1.643

FACTOR # 4 = 1.343

FACTOR # 5 = 2.643

FACTOR # 6 = 1.283

- 11 夫が今まで以上に私や子どもに優しく気を使ってくれるようになった。
(.583)

- 22 やはり家族は一緒の方がよいとしみじみわかった。
(.530)

以上の5項目は、夫がいないために、妻のさびしさやつらさがつづいた、夫が妻や子に優しく気を使ってくれるようになった、家族は一緒の方がよいとわかったなど、「家族が一緒であることの大切な認識」因子と考えられる。この因子の評定値が小さくなればなるほど、家族のきづなが弱まった状態と言えるであろう。

第2因子は、次の5項目から構成されている。

- ⑦ 夫婦の会話が少なくなって、考え方にズレが生まれるようになった。
(.573)

- ⑩ ますます父と子の距離が離れた。
(.562)

- ②③ 夫は家庭よりも会社を優先する人間だと思う。
(.558)

- 15 子どもが父親に感謝する気持ちが強まった。
(.477)

- ②④ 夫婦生活にヒビが入るのではないかと不安である。
(.443)

以上の5項目は、夫婦間のズレの拡大、父子間のズレの拡大、夫は家庭よりも会社を優先させ家族は犠牲にさせる人間だといった思いを示し「夫婦間、父子間の不信心」因子と考えられる。この因子の評定値が大きくなればなるほど、家族のきづなが弱まった状態と言えるであろう。(項目番号が○でかこまれている項目は一の負荷量を持つことを示している)

第3因子は、次の3項目から構成されている。

- ② 生活のリズムがむしろとりやすくなった。
(.661)

- ③ 自由に時間を使え、楽しめるようになった。
(.623)

- ⑩ 自分自身の人生を改めて考え、自分自身の目標をもとうと思うようになった。
(.358)

以上3項目は、夫がいなくなったために、生活のリズムがとりやすくなった、時間が自由に使え、楽しめるようになった。また、夫や家族とではなく、自分自身の人生の目標を持とうと思うようになったなど、「妻の自由さと自立」因子と考えられる。この因子の評定値が大きくなればなるほど、家族のきづなが弱まった状態と言えるであろう。

第4因子は、次の2項目から構成されている。

- 19 なるべく子どもに夫の仕事ぶりや生活ぶりを話すようにしている。
(.678)

- 18 子どもが私に協力してくれるようになった。
(.667)

以上2項目は、母子間のコミュニケーションや子どもの母親に対する協力など、「母子間の協力」因子と考えられる。この因子の評定値が小さくなればなるほど、家族のきづなが弱まった状態と言えるであろう。

第5因子は、次の4項目から構成されている。

- ⑩ 子どもが精神的に不安定になった。
(.741)

- ⑭ 子どもの学力が低下した。(714)

- ⑩ 夫がいれば、子どもの生活や態度にもっとけじめがつくと思う。(631)

- ⑩ 子どもが私を甘くみて勝手にふるまうようになった。(604)

以上5項目は、子どもの不安定や学力の低下、生活や態度が日常生活でのけじめが失われるなど「子どもの問題化」因子と考えられる。この因子の評定値が大きくなればなるほど家族のきづなが弱まった状態と言えるで

あろう。

第6因子は、次の2項目から構成されている。

5 夫が一番大変なのだと思う。

(.722)

4 夫に不自由な思いをさせてすまないと思う。

(.602)

以上の2項目は、妻が夫の大変さや不自由に配慮している項目であり、「夫への配慮」因子とすることができる。この因子の評定値が小さくなればなるほど家族のきづなが弱まった状態とすることができる。

このように、「家族認識」因子、「夫婦間、父子間の不信」因子、「妻の自由・自立」因子、「母子間協力」因子、「子の問題化」因子、「夫への配慮」因子の、第6因子構造、21項目の単身赴任家族を対象とした家族関係評定尺度を構成することができた。項目の軸を一致させることによって、1から5までの範囲で、単身赴任家庭の家族関係について、家族のきづなが強まった状態であるか、弱まっている状態であるかを示すことが可能になる。さらに、因子別の評定値を比較することによって、家族関係のどの側面に問題があるのかを診断することも可能であろう。

すでに述べたように、単身赴任という勤務形態は、日本においては普遍的なものになっ

ている。また、今後も増加することはあっても減少することはないであろうと予測されている。単身赴任は、家族関係に多くの問題を引き起こしているが、それに反して研究はきわめて少ない。本研究で示した。単身赴任家庭を対象とした家族関係評定尺度は、試作的なものではあるが、単身赴任家庭の家族関係研究上では有意義なものであろう。

* 本研究の第1次調査および、その報告である依田明他は、安田生命社会事業団からの研究助成（昭和59年度）を得ている。

引用文献

- 労務行政研究所編 1984, 転勤をめぐる各種取り扱いの実態 労務行政研究所
- 鈴木乙史 1986, 単身赴任のストレスと家族問題, 現代のエスプリ, No.225 男性のストレス 至文堂
- 鈴木乙史 1987, 単身赴任と家族の危機, 現代のエスプリ, No.235 家庭の風景 至文堂
- 依田 明・鈴木乙史・清水弘司 1984, 父親不在家庭の家族関係, 安田生命社会事業団研究助成論文集 Vol. 20 157～164